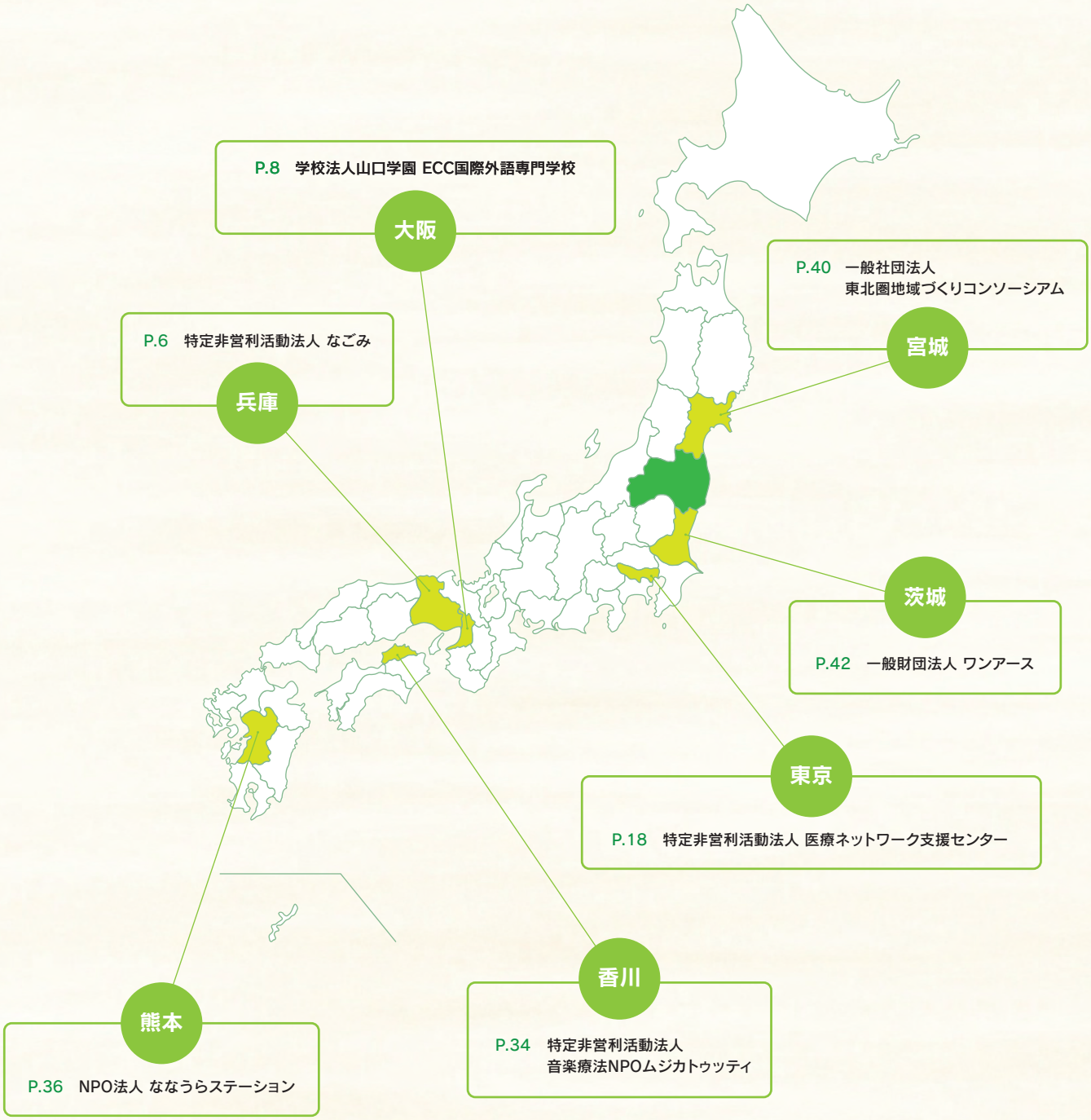
復興の礎はいまここに一歩、一歩

令和4年度 ふるさと・きずな維持・再生支援事業

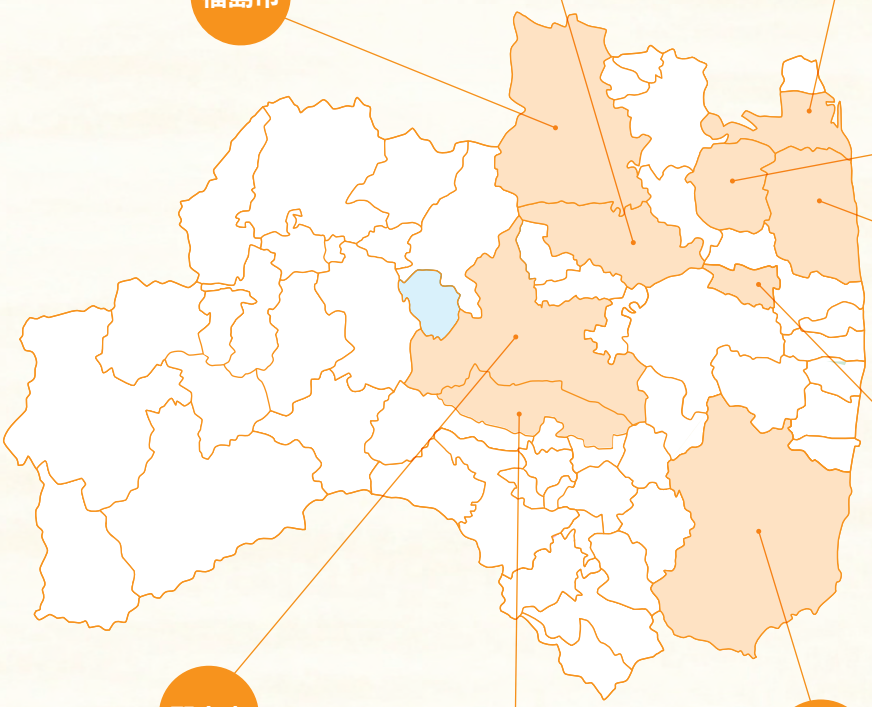
活動成果報告書

福島県

県内外の多くの団体の皆様に
ご活動いただきました。



本事業の採択団体の所在地を表示しております
（補助金交付決定時点　1次 R4.6.1　2次 R4.9.1）



二本松市

P.10　特定非営利活動法人 がんばろう福島、農業者等の会

相馬市

P.12　松川浦ガイドの会
P.20　特定非営利活動法人 相馬はらがま朝市クラブ
P.26　特定非営利活動法人 野馬土

福島市

P.14　福島県商工会青年部連合会
P.46　一般財団法人 飯舘までい文化事業団
P.48　一般社団法人 Bridge for Fukushima

飯舘村

P.16　特定非営利活動法人 ふくしま再生の会

南相馬市

P.22　特定非営利活動法人 南相馬サイエンスラボ

葛尾村

P.38　一般社団法人 葛力創造舎

郡山市

P.24　特定非営利活動法人 コースター
P.30　特定非営利活動法人 富岡町3・11を語る会
P.44　認定特定非営利活動法人 未来といのち

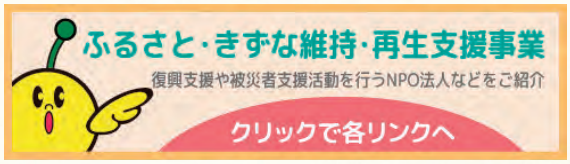
いわき市

P.32　特定非営利活動法人 Global Mission Japan

須賀川市

P.28　特定非営利活動法人 OYAKODOふくしま

ふくしま地域活動団体サポートセンター　URL https://f-saposen.jp/



◀ トップページの「ふるさと・きずな維持・再生支援事業」バナーをクリックすると項目が表示されます。
各年度の採択団体の事業内容、活動の様子などをご覧いただけます。

はじめに

東日本大震災から12年が経過しましたが、現在も2万7千人を超える方々が県内外で避難生活を続けており、避難地域における地域コミュニティの維持・再生、原子力災害による根強い風評、時間の経過に伴う風化、さらにはALPS処理水の海洋放出による新たな風評の懸念など、様々な課題が山積しています。

県では、東日本大震災及び原子力災害からの復興等に向けNPO法人等が行う復興支援や風評払拭等の取組を支援するため、内閣府の「NPO等の「絆力（きずなりょく）」を活かした復興・被災者支援事業交付金」を活用して、「ふるさと・きずな維持・再生支援事業」を実施しております。

この事業により、被災者・避難者の交流サポートや心と体のケア、復興課題を把握し活動できる人材の育成、風評払拭のための交流活動、復興に取り組むNPO等への中間支援など、NPO法人等により被災者同士、被災者と支援者等を結びつける「絆力」を活かした、きめ細かな支援活動が展開されました。

本冊子は令和4年度「ふるさと・きずな維持・再生支援事業」により、復興支援・風評払拭等に取り組まれた22団体の活動実績及び成果についてまとめたものです。

引き続き、NPO法人等をはじめ、行政や企業、地域住民等による協働を推進し、これらの活動が本県を復興へと導く大きな力として、本県のきずなの維持・再生、そして、復興がさらに加速されることを期待しております。

結びに、本冊子をより多くの皆様に御覧いただき、これからの地域活動、復興支援・被災者支援活動の参考としていただければ幸いです。

本事業の実施に当たり、御協力いただきました関係者の皆様に心より感謝を申し上げますとともに、皆様の更なる御活躍を祈念いたします。

福島県企画調整部
文化スポーツ局　文化振興課

目　次

ページ番号	実施団体名 事業名
P.6	**特定非営利活動法人 なごみ** 福島・西宮つながるプロジェクト
P.8	**学校法人山口学園 ECC国際外語専門学校** 福島県復興支援チャリティカフェ「カフェ・ラポール」
P.10	**特定非営利活動法人 がんばろう福島、農業者等の会** ～つながる福島！サステナブルマルシェ事業～
P.12	**松川浦ガイドの会** 『出張！そうま復活の浜焼き』事業
P.14	**福島県商工会青年部連合会** ふくしマルシェ
P.16	**特定非営利活動法人 ふくしま再生の会** アート×サイエンスで里山再生
P.18	**特定非営利活動法人 医療ネットワーク支援センター** 震災体験からの教訓を未来につなぐ（風化防止）語り部プロジェクト
P.20	**特定非営利活動法人 相馬はらがま朝市クラブ** まちづくりデータベース事業
P.22	**特定非営利活動法人 南相馬サイエンスラボ** 風評払拭を目的とした被災地と首都圏及び、海外を結ぶ体験交流活動と、風評払拭を推進する教育の仕組みづくりの必要性を首都圏の人々と共有する地域教育を考える勉強会
P.24	**特定非営利活動法人 コースター** 福島の魅力発信・課題解決に向けた大学生向けインターンシップおよびNPO等における復興人材獲得・育成力強化プロジェクト
P.26	**特定非営利活動法人 野馬土** 「ふくしまル。」推進活動と地域を元気にする窓口化プロジェクト

P.28	**特定非営利活動法人 OYAKODOふくしま** 農業復興に向けた都内在住高校・大学生と生産者との交流体験及び情報発信事業
P.30	**特定非営利活動法人 富岡町3・11を語る会** 富岡町の「明日」を創るコミュニティ形成事業　～多様な居住者をつなぐ表現活動の実施～
P.32	**特定非営利活動法人 Global Mission Japan** 約束の地ふくしま
P.34	**特定非営利活動法人 音楽療法NPOムジカトゥッティ** 音楽療法による復興支援 IN 福島 2022・コミュニティの賑わいの創出
P.36	**NPO法人 ななうらステーション** つながろうFortune Island
P.38	**一般社団法人 葛力創造舎** 葛尾村における祭および郷土芸能等の文化伝承をきっかけにしたコミュニティー再生事業
P.40	**一般社団法人 東北圏地域づくりコンソーシアム** 東北～北海道ブロック広域避難者支援団体情報交換・研修会および合同視察会の開催
P.42	**一般財団法人 ワンアース** 宇宙県産品を活用した県外との交流創出
P.44	**認定特定非営利活動法人 未来といのち** From Fukushima ふくしまを正しく伝える写真パネル巡回展～大地と人の力～
P.46	**一般財団法人 飯舘までい文化事業団** 「までいな家」をみんなの家に―飯舘村民と大学生が協働する飯舘村復興を目指す3つのプロジェクト
P.48	**一般社団法人 Bridge for Fukushima** ファンドレイジング力向上による、福島県内NPO等団体の組織基盤強化事業
P.52	**アンケート調査結果**

活動団体
紹 介

特定非営利活動法人 なごみ

団体概要	
所在地	〒662-8132 兵庫県西宮市東鳴尾町2丁目16-19-102
TEL	0798-20-2333　FAX　0798-20-2339
E-mail	naru.nago@gmail.com
URL	https://narunago.wixsite.com/machicafe

活動地域	兵庫県西宮市
活動分野	社会教育 まちづくり 地域安全 子どもの健全育成

課題・背景

福島県では少しずつ震災からの復興が進んでいるように見えますが、一方で心の復興や見えない風評は引き続き生じていることを令和3年に福島を実際に訪れ知りました。福島県の素晴らしい文化と食材、そこで生きる住民のことを正しく知り、兵庫県西宮市でも一緒になって今の課題に向き合い、「旬」や「特産」を味わえる活動を対等な関係で継続し、他人事ではなく、それぞれの場所でできる形で活動を行うことが風評払拭になると考えています。

目　的

福島県の震災復興と原子力災害における農林水産物の風評払拭活動を目的とし、遠く離れた兵庫県西宮市で常設での福島物産品の販売と、大学生と連携して実施する「マルシェ」イベントを開催することによって、福島との継続的なつながりと復興・風評払拭活動を行いたいと思います。

メディアやSNS等でキャッチする多様な情報によって「何が正しい情報なのかがわからない事」により、不安と風評が社会に生み出されている事が令和3年度の活動でわかり、知る事・考える事・体感する事を継続して実施したいと思います。

取組内容・実績

取組1

毎月1回（第3土曜日）に本法人が運営する地域交流拠点『まちcaféなごみ』前スペースで「もっとほっとマルシェ」を開催。この活動を、武庫川女子大学経営学部の実践学習プログラムとして取り組み、福島県産の農産物や果物、手作り物産品を販売しました。その他、交流拠点内に昨年設置した『福島県の物産販売コーナー』の商品入荷先を拡大し、道の駅なみえとの取引を新たにスタートしました。

取組2

今年度は8月と11月の2回に分けて、兵庫県西宮市より計4名が福島へ視察に行きました。ツアー・訪問の内容はそれぞれ違いますが、いずれも「福島の今を知る」をテーマに福島で活動している方や団体や企業、NPO、農家（農家民宿に宿泊）を訪問し、交流を通じて学ぶ機会をつくりました。ただ福島の物を販売するのではなく、生産者とお互いの顔が見える関係で、福島で暮らす人とのつながりをこれからも大事にしていきたいと感じました。

取組3

活動を行う兵庫県西宮市に戻ってきたあとも、取組2の経験や学びを「伝える」様々な取組を行いました。活動報告会や販売会、勉強会に1日レストラン企画など、福島の食材や現状をテーマとした企画を実施することで、多くの方の目に留まる機会と考える場づくりに取り組みました。

事業の成果

今年度は西宮市より4名（うち3名が大学生）が実際に福島県を訪問し「福島の今」を実際に知る機会を作ることができました。西宮市に戻ってからも、オンライン報告会やマルシェ、福島県の食材を使った1日限定ショップの開催など、遠く離れた兵庫県西宮市内で「福島」の現状や魅力を伝える機会を作ることができました。

また、昨年までは福島県観光物産協会より、定期的に物産品を入荷し『まちcaféなごみ』にて販売しておりましたが、新たに道の駅なみえから商品の入荷ルートを開拓できたことや、訪問したリンゴ農家さんや昨年訪問した遊雲の里ファームさんからも継続して農産物を注文し、関係性を続けられていること、『NPO法人がんばろう福島、農業者等の会』さんに毎月農産物の注文を行うなど、目標としている「継続的なつながりづくり」が実現できました。

今後の展開

今後はより多くの福島県内の活動団体や学校園などとつながり、活動交流や協働事業などに取り組めたらと思っています。例えば、関西方面で開催される福島物産展やイベントなどに一緒に参加させていただいたり、福島で開催されるイベントに西宮市のブースを出展したりと、交流とつながりを深められる活動を行えたらと考えています。

福島県復興支援チャリティカフェ「カフェ・ラポール」

学校法人山口学園 ECC国際外語専門学校

団体概要	
所在地	〒530-0015 大阪府大阪市北区中崎西2-1-6
TEL	06-6311-1446　FAX　06-6311-1440
E-mail	nmaekawa@ecc.ac.jp
URL	http://kokusai.ecc.ac.jp/

活動地域	大阪府
活動分野	社会教育

課題・背景

取組をはじめた背景

東日本大震災発生時に、当時の在校生が「(被災地へ)何かできる事はありませんか？」と、発した言葉をきっかけに同取組を企画。学生が在学中に得た学びを活かし、一般のお客様をお迎えするカフェ「カフェ・ラポール」を卒業制作としてスタートしました。学生は卒業前に貴重な実体験の場を頂けること、お客様は学生のおもてなしを受けることで社会貢献ができ、売上金は福島県に寄附するシステムで、三者三様にメリットがあると思い始めました。

課題

時間の経過とともに震災の記憶も風化しており、また、関西では福島県の情報を得る機会が少ないと感じます。学生が福島県を実際に訪れ、現状を学び、風評でなく学生たちが五感で体感した「ふくしまの今」を、カフェに来店されたお客様へ、また、SNSを通し情報発信し、風評・風化対策に取り組みます。

目　的

- 福島県の現状把握と正確な情報発信により、風評・風化防止に取り組む。
- 若者の情報発信力で、同世代への正しい理解と、食の「安心・安全」、質の良さをPRする。
- 在学中に得た専門力とホスピタリティ精神を活かし、地域社会に貢献する。

取組内容・実績

取組1

福島県視察「スタディツアー」

2022年9月14日～16日に、カフェを運営する学生の有志メンバー19名(21名中)で、福島県を訪問しました(2泊3日)。請戸小学校、東日本大震災・原子力災害伝承館を見学し、津波で被災した福島県沿岸部を視察。自然災害の恐ろしさと災害への備えの大切さを五感で体感しました。また、ワンダーファーム、福島しろはとファーム、菱沼農園を訪問し、震災後の風評や最先端の農業による復興、地域再生への取組についてお話を伺い、未来へ歩みを進める「ふくしまの今」を学びました。ツアーに参加した学生は、県民の皆様の温かいお人柄に触れ、福島県をより身近に感じることができました。

取組2

福島県復興支援チャリティカフェ「カフェ・ラポール」の開催

ホテルコース卒業年度生が、在学中に得た専門力とホスピタリティ精神を活かし、5日間限定のチャリティカフェを運営。菱沼農園の冷凍の桃を使用したオリジナルノンアルコールカクテルや白ハト食品工業と楢葉中学校「Nalys」の学生が共同開発した「ならは～とケーキ」など福島県の食材を取り入れたメニューを提供し、福島県の食の安全性と美味しさをPRしました。また、ポリエステル媒地で栽培される「川俣アンスリウム」や、代替プラスチックとして古米を活用する「ライスレジン製のレジ袋」宇宙帰還酵母を使用する「東北復興宇宙酒」等を取り扱い、福島県の新たな取組として紹介しました。5日間の営業期間中、1,011名様に来店いただき、売上合計563,228円を令和5年2月2日に東北地方太平洋沖地震に対する寄附金として、福島県に寄附いたしました。

取組3

教員のSDGs研修及び授業の展開

〈取組1〉のスタディツアーを波及させ、本年度は、初めて教員（7名）を対象とした福島視察研修を行い、各担当授業にて福島県の取組や震災について考える授業を企画し実施しました。受講生からは、福島県に縁がなく、震災後、考える機会がなかったという声がありましたが、初めて知る福島県の復興の歩みに、真剣に耳を傾けてくれました。また、授業展開をしたことにより、ホテルコース以外の学生が〈取組2〉のカフェへも興味を持ち、積極的にカフェの活動に協力してくれました。ホテルコースの取組が他コースの学生の中で「自分事化」された証であり、大変良い情報発信の一手となりました。

事業の成果

今年度は、営業期間をコロナ禍前の5日間に戻しカフェ営業を行い、1,000名を超えるお客様に来店いただきました。第1回目の開催から12年間の活動で、総来店者数が10,000名を超え、記念すべき年となりました。12年間継続してきたことで、学校関係者だけでなく、地域の皆様にもカフェ・ラポールを認知いただいており、大阪で福島県を身近に感じていただける場となっています。学生が福島県に愛着を持ち、胸を張って福島県の魅力をPRする姿に、毎年、お客様から温かいお言葉が寄せられています。今年度、歴代初の生花販売として取り扱った「川俣アンスリウム」はお客様から多くの反響を呼びました。震災の記憶の風化防止と風評払拭とともに、来店いただいたお客様に、新たな福島県の魅力に出会っていただける場として力になれていたら幸いです。

今後の展開

今年で12年目の開催を終えました。今年も福島県の復興に取り組まれている企業様と活動を継続することができました。今後も多くの企業・団体の皆様と「共動」を目指し、関西地域から福島県の支援を実現していきたいです。関西地域の皆様（特に、学生世代）が福島を知るきっかけであり、福島県の現状と魅力発信の情報の起点となれるよう、微々たる力ではありますが、末永く活動を続けてまいります。

特定非営利活動法人 がんばろう福島、農業者等の会

団体概要	
所在地	〒964-0976 福島県二本松市新生町490
TEL	0243-24-1001　FAX　0243-24-1536
E-mail	g@farm-n.jp
URL	http://www.farm-n.jp/

活動地域	福島県、全国
活動分野	まちづくり・観光振興・農林漁村中山間・環境保全・災害救援・経済活性化・消費者保護

課題・背景

当NPOは県内50以上の農家とネットワークを結び、風評対策及び地域復興のため事業を行ってきた。これまではWEBショップのほか関東圏をターゲットに直接販売等で福島に興味のある消費者、団体等とつながりができつつあったが、コロナ禍で福島への理解を深めてもらう機会が減少。一度できたつながりも希薄になった面があったため、今回新たにオンラインマルシェを導入し、いかなる状況下においてもつながりを継続できる仕組みの構築を行うこととした。

目　的

この事業はライフスタイルが多様化する現代の需要に合わせたサステナブルな取組である。感染症等の要因により外出できず安全安心な農作物を入手できないということは困ったことで、一方農業者団体は、日々の食材を各家庭に届けるのが使命でもある。このため、ネットが苦手な年配層向けに直接販売マルシェを行い、ネット世代向けにはオンラインマルシェを行い、これら両輪で首都圏のみならず全国どこからでも福島の農産物を買える仕組みを構築することとした。

取組内容・実績

取組1

風評払拭と震災の風化防止のため、週1～2回、オンライン（インスタライブとネットショップの組み合わせ）で野菜や果物、加工品等の通信販売を実施した。消費者はインスタライブを見て即座に県産農産物を購入でき、翌日か翌々日には手元に届く。

福島県の農家とのつながりを活かし、新鮮でおいしい農産物を全国の幅広い年齢層の消費者に届けることができた。

コロナ禍の今、対面できない状況でも継続して関係を保ち続けるための手法としてオンラインは効果的であることがわかった。

取組2

週1～2回程度定期的に東京都内において県産農産物の直接販売を行い、幅広い世代の消費者との関係構築及び県産農産物の魅力発信を行った。

直接顔を見て販売する里山マルシェを実施することで、県産農産物への風評を払拭し、さらに強い関係を構築することができた。

県産農産物のおいしさや安全性を直接伝えられる里山マルシェは消費者の満足度も高く、今後も継続して行っていくことでさらなるつながりを深め、県産農産物の理解促進に貢献する。

事業の成果

今回のサステナブルマルシェ事業では、SNSのライブ機能を使って定期的に県産農産物の魅力やおいしさを配信した。また、これまでの経験を活かし県内農家と協力して東京都内において直接販売を行った。

オンライン里山マルシェでは、福島県内はもちろん全国各地から配信を見てくださり、いつも見てくださる方やコメントをくださる方が増えたり、配信を見て野菜を購入してくださった方が、東京での里山マルシェにも来てくれたりと、福島県と全国とのつながりがより強くなった。

東京での里山マルシェでは、顔を合わせて直接会話をすることで県産農産物に対する風評払拭ができ、理解を深めてもらうことができた。首都圏ではファン層の多い上野を中心に直接販売を行い、そこに運べない方々にはオンライン販売で県産農産物をお届けできるようにすることで、風評払拭、震災の風化対策となった。

今後の展開

どんな状況下においても「つながり」が遮断されないサステナブルな事業を今後も継続して行っていく必要がある。つながりができた顧客に対しては、福島県の食の安全性・魅力発信を引き続き行っていく。

『出張！そうま復活の浜焼き』事業

松川浦ガイドの会

団体概要	
所在地	〒976-0022 福島県相馬市尾浜字船越129
TEL	0244-35-3300　FAX　0244-35-3210
E-mail	mikiko.endo2017@gmail.com
URL	https://www.instagram.com/official_matsukawaura/?hl=ja

活動地域	相馬市
活動分野	観光振興 経済活性化 職業能力雇用

課題・背景

震災前、相馬市の沿岸部地域（原釜、尾浜、松川浦地区）では、景観や潮干狩り、海水浴、地の魚を使った料理が市の観光産業の柱となっていました。しかし、震災及び原子力災害以降、漁獲した魚の安全性に対しての風評もあり、食を活用した観光のみでは震災前までの経済活動ができない状況にあります。

目　的

震災前に松川浦地区で行われていた『地の魚を活用した浜焼き』を復活させ、県内外で実演販売するとともに、安全安心な魚を流通させていることをチラシ、SNS等でPRすることで風評払拭に取り組むことを目的とします。

取組内容・実績

取組1

福島市及び福島市隣接自治体の住民向けに、「道の駅ふくしま」で9月3日～4日の2日間、浜焼きの販売イベントを実施しました。県内で相馬市以外の販売イベントは初めてでしたので、どのくらいの来場があるか不安でしたが、開店前から多くの方に並んでいただき完売することができました。

取組2

山形県米沢市及び米沢市隣接自治体の住民向けに、「道の駅米沢」で6月5日に浜焼き販売イベントを実施しました。県外で行う浜焼き販売イベントは初めてでしたが、福島市や喜多方市、相馬市からも来場いただき、完売することができました。ただ、山形県での「復活の浜焼き」知名度は低いと感じました。しかし、浜焼き目当てではない道の駅に立ち寄ったお客様にも購入いただき、「美味しかった」などのお声をいただきました。また、地元のケーブルTVにも取材していただきました。

事業の成果

「道の駅米沢」、「道の駅ふくしま」ともたくさんの方に来場いただき、3日とも持参した数量を完売することができました。県産水産物の安全と美味しさを届けるという点で風評払拭に寄与できました。

また、このイベントをきっかけにマスコミ各社に取り上げていただき、浜焼きをとおして「県産水産物の美味しさや豊かさ」「魅力や安全性」を全国にPRすることができました。

今後の展開

県外での浜焼き販売イベントを行い「ふくしま常磐もの」の美味しさと食の安全を届けていきたいです。

また、海のアクティビティ（体験コンテンツ）をとおして、地元の人と触れ合う事で地域の魅力を感じてもらいたいと思います。震災後、海遊び体験をしていない子どもや親に海の楽しさを体感してもらい「ふくしまの海」への風評を払拭したいと思います。

福島県商工会青年部連合会

団体概要	
所在地	〒960-8053 福島県福島市三河南町1番20号 コラッセふくしま9F
TEL	024-525-3411　FAX　024-525-3413
E-mail	fukushimaken-seiren000@all-impulse.com
URL	https://fukushima-kenseiren.jimdo.com

活動地域	福島県
活動分野	まちづくり 災害救援 地域安全 経済活性化 その他

課題・背景

消費者庁の風評に関する消費者意識の実態調査によれば、放射性物質を理由に購入をためらう産地として福島県と回答した割合が6.5%であったのに対し、「それぞれの食品の安全に関する情報提供が欲しい」という方の割合が46.1%であった。この事から改めて食の安全性を県内外へ周知する必要性があると考え、本事業では対面により消費者に食の安全性をPRする機会を提供する。また、復興を支える大人たちの背中を子どもたちに見せる事で郷土愛を育み、震災後止まらない若年層の県外流出を抑えることで今後の復興につながると考える。

目　的

東日本大震災及び原発事故により、本県の産業に対する風評は現在も続いている。加えて、甚大な被害をもたらす台風や豪雨による災害も頻発。そこに追い打ちをかけるコロナ禍。そのような中、商工会として今の復興を支える大人世代と次世代の復興を支える子ども世代の為にも、様々な団体と飲食業を中心とした事業所と協力し、「福島の食と笑顔」を県内外へ発信することで、災害からの復興、地域活性化並びに風評払拭を目的とする事業である。

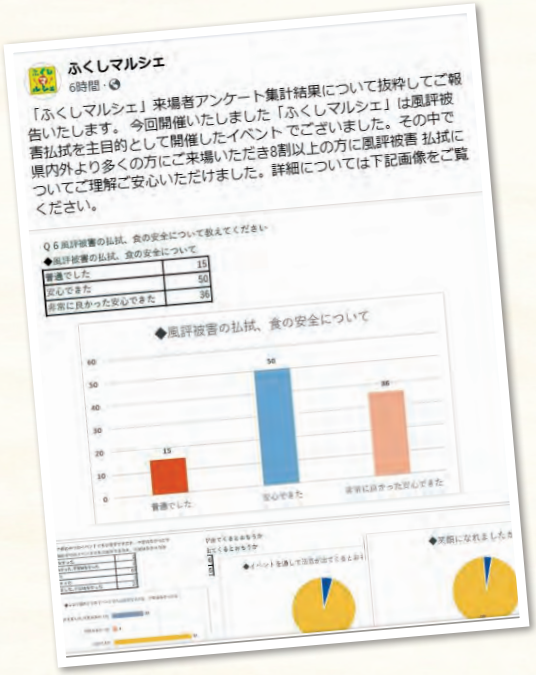
取組内容・実績

取組1

県内各所の特に飲食業を中心とした事業所を調査・ピックアップ。そのお店や商品の特徴や価値、安全性をFacebook、Instagram、TwitterなどのSNSを用いて県内外、並びに世界に発信をすることで風評の払拭と事業所のPRを行った。

取組2

いわき市アクアマリンパークにて県内の飲食事業所を中心とした41店舗が参加し、スポーツ団体からはいわきFC、福島レッドホープスの2団体より選手を派遣していただき、「ふくしマルシェ」を開催した。司会の関あつしさんをはじめ選手の方々が食の安全性についてPRした。選手たちにはリフティング対決やストラックアウトなど来場した子どもたち向けの企画にも参加してもらった。



取組3

「ふくしマルシェ」イベント終了後来場者へのアンケート、受益者の方へのアンケートを実施した。来場者からは風評払拭、食の安全についての回答で「安心できた」と回答した方が9割だった。受益者についても「風評払拭につながった」という回答が約8割だった。アンケートの集計結果については、SNSで配信した。

事業の成果

風評払拭の場を設けることができ、数多くの来場者の方へ福島県産品の安全性をPRできた。来場した子どもたちがいわきFC、福島レッドホープスの選手とリフティング対決やストラックアウトなどで触れ合い、福島のファンになるきっかけを作ることができた。

また、災害からの復興に関して、大きな被害を受けたいわきの地へ約6,000名を超す県内外の方に実際に来訪頂けたことは、開催したいわき市を含めた福島県全体の復興につながる一つのきっかけとなった。

今後の展開

いわき市観光振興課より、いわき大物産展で当団体とコラボしたいとのありがたいお言葉を頂いており、まだ各種未定ではあるが前向きに取り組みたいと考えている。当該イベントは福島県商工会青年部連合会が主となり計画・運営を行ったが、今後は福島県内に88存在している商工会青年部を補助し、より福島県全体が活性化できるよう計画している。

特定非営利活動法人 ふくしま再生の会

団体概要	
所在地	〒960-1815 福島県相馬郡飯舘村佐須字滑87-1
TEL/FAX	0244-26-5224
E-mail	desk@fukushima-saisei.jp
URL	http://www.fukushima-saisei.jp/

活動地域	飯舘村
活動分野	保健医療福祉・社会教育・観光振興・農林漁村中山間・文化芸術スポーツ・環境保全・災害救援・地域安全・科学技術・連絡助言援助

課題・背景

2021年に飯舘村の里山再生をテーマに、アーティストと地元村民が一緒に作品を制作する事業を開始した。また村内の若者が広い倉庫空間（図図（ずっと）倉庫ZUTTOSOKO）を改装し、農業・エネルギーの実験場・村民や来訪者の集いの場として活用する事業を開始した。当会は2011年から村民との協働を旨とし、原発事故被災地域の再生を目標に活動してきたが、活動の中心は60代から80代と高齢化しており、若い世代と連携が必要と考え図図倉庫を活用した展示を企画した。

目　的

自然と人間の関係を考えるとき、自然科学の知見は土台といえる。そうした知見は論文として発表されるが、一般の人が関心をもつ機会は限られている。一方でアーティストのとらわれない発想と表現力は見る側の感性を刺激する発信力をもっている。原発被災地である飯舘村で、帰村した村民、移住者、村出身で村外に住む人、来訪者、研究者、アーティストが交流しながら、被害の実相と将来の展望を発信する。

取組内容・実績

取組1

酒百（さかお）宏一氏の「までい花プロジェクト」は飯舘村の落葉樹の葉っぱを素材に飯舘村の花を表現する作品を作る。社会福祉協議会の協力で高齢者約100名が参加した。酒百氏の手法は多くの人が参加し、土地の記憶を作品として作り上げている。作品の一部を使って3月に図図倉庫に展示したが、今後も参加者を募り大きな作品に仕上げる予定である。発想のもととなった飯舘村の花の写真集とポスターを制作した。

取組2

長谷川仁氏の活動は村内で村民と協力して工芸作物のおもちゃカボチャと瓢箪を栽培し、それを素材として作品を作り上げるものである。村内に農地を借りてカボチャと瓢箪を栽培したが、企画していた子ども向けのカボチャのイベントは、天候不順や風害で必要な数だけ育たなかったので中止せざるを得なかった。イベントに変えて図図倉庫と東京渋谷のヒカリエでカボチャと瓢箪の作品の展示を行った。

取組3

プロジェクト全体のコンセプトをまとめた「飯舘村で世界に触れる。図図倉庫」パンフレットを制作した。図図倉庫内に放射線の動きを観察できる霧箱を展示している。3台の霧箱にはモナズ石、ランタンマントル、飯舘村の田圃の土を観察できるようにして、訪問者にわかりやすく解説した。解説を受けた人は、村民の他、栃木県立大田原高校、東京大学、早稲田大学などの大学生、生活クラブ生協などのツアーが含まれている。

事業の成果

図図倉庫という若者が中心となって運営する場所を、作品や実験観察装置を展示する場所としたことにより、広範囲の人々との多様な交流ができ、原発被災地の放射線や放射能についての科学的な基礎を訪問者が直観的に理解することに貢献した。また、「飯舘村で、世界に触れる。」パンフレットを制作したことにより、従来の活動を今後どういった方向につなげていくかという課題の整理が進み、それを具体的なイメージに落としこんでいるため、将来に向けた方向性を広く伝えることができた。社会福祉協議会などを通じてアートワークへの参加を呼び掛けるなど、アート活動への理解が深まった。村内に咲く花のポスターやパンフレットにより、自然の豊かさや美しさを伝え、村民が地域の資源を再認識するとともに、ツアー関係者等にアピールできた。アート活動の開始から図図倉庫での展示までをまとめた動画を制作しYouTubeで公開した。

今後の展開

自然と人間との関わりの在り方を検証できるきっかけとなるよう、図図倉庫の展示内容の充実を図る。アート活動については、帰村した住民、村外に居住している飯舘出身者や飯舘村に関心を寄せている人が参加できるワークショップを開催して、多くの人が参加する作品を制作していきたい。瓢箪など工芸作物による作品の開発も継続し特色ある商品開発にも取り組んでいきたい。地域の魅力の発信と交流・関係人口の増加を目指している。

震災体験からの教訓を未来につなぐ（風化防止）語り部プロジェクト

特定非営利活動法人 医療ネットワーク支援センター

団体概要	
所在地	〒160-0023 東京都新宿区西新宿6-15-1-412
TEL	03-6911-0582　FAX　03-6911-0581
E-mail	contact@medical-bank.org
URL	http://www.medical-bank.org/

活動地域	首都圏近郊
活動分野	保健医療福祉

課題・背景

首都圏では大災害に備えた防災意識啓発が重要になっている。震災の風化も懸念され、子どもたちが学校の授業を通じて震災を知り、家庭で学びを伝える形で大人への啓発に取り組んでいる。昨年度の本事業で教育関係者、教育委員会、自治体との連携ができたことで、教員もまた震災や避難の実感がないため、命を守る技術だけの教育に偏っていることを把握した。そのため教員への生きた情報提供が必要だという現状がわかった。

目　的

児童に加え教員と教員を目指す大学生も対象とする。児童には昨年度制作した震災体験を伝える教材を活用して、当事者意識を育むための防災・道徳授業を推進する。教員には震災や避難の状況を実感できるよう、教員向けのセミナーと福島県の震災遺構の視察や被災者から生の声を聞く機会を作る。セミナーと視察は、教員を目指す教育学部の大学生も対象とし、次代の教員に震災の教訓を伝えることで継続的な風化防止を図っていく。

取組内容・実績

取組1

福島視察・教員セミナー

教員や学生を対象として震災遺構・請戸小学校の視察や東日本大震災・原子力災害伝承館の見学、フィールドパートナーの解説を聞きながら双葉町を歩く被災地視察ツアーを2回実施。

その中でも、春日部市の教員関係者を対象とした座談会では、震災当時に小学校教頭や教務担任であった方々より当時の状況や教訓になったことなどを聞き、現職の教員にとって刺激を受ける機会となった。

取組2
語り部授業

絵本冊子「ぼうさいは、みんなのおもいやりから ワークブック」を使用した授業を実施。福島視察に同行した先生のクラスでは、防災教育の導入から児童自らの課題発見、成果発表会まで一連の流れとして実施するサポートも行った。

また、県外避難者による語り部授業を首都圏のほか福岡の学童保育施設で実施した。今年度も大川義秋さんにご参加いただき、お箏と共に震災経験を児童にわかりやすく伝えていただいた。

取組3
教員用参考書教材

教育現場の識者を委員として意見をいただく風化防止委員会と共に福島視察に同行した先生方の意見も参考に、東日本大震災において情報リテラシーが必要だったことを教訓に防災教育の教材を制作。教員が参考とするための教材だけでなく、風化防止委員会にて児童に教える教材も同時に必要との意見があったため、児童用も制作した。災害時に情報を正しく受発信することが重要だったという避難者の経験から、情報リテラシーの重要性を先生方が理解できるよう事例を盛りこみ、児童用冊子に基づいて授業におけるポイントを記載することで先生方が教えやすいように工夫した。

事業の成果

- 教員セミナーでは、震災当日に小学校教頭や教務主任を務めていた方から直接お話を聞くことで、“日頃の避難訓練の重要さ” や “状況に合わせた行動の重要性” などの助言が身に染みて感じることができた。
- 学生を対象とした研修バスツアーにおいては、教員を目指している学生のみならず様々な学部からの参加があり、今後もより多くの学生たちに風化防止の活動を拡大していく効果があった。
- 震災の状況を深く知るため、双葉町の中を実際に歩くフィールドワークを実施し、フィールドパートナーによる詳しい説明と共に被災地に足を踏み入れることで当日の状況がより鮮明に実感できた。
- 出前授業では、視察に参加した先生方の授業も行いつつ、県外避難者の生の声を聞くことで、「普段からの危機管理」の重要性を実感していただけた。

今後の展開

今年度実施した被災地視察ツアーは、現職教員だけではなく教員を目指す学生や震災の風化に興味を持った方々も参加し、次世代につなぐ第一歩として大きな手応えを感じた。また、現地の方のお話の中で「教員とまちとの協力によってその場判断になることが多かった」と伺った。今後もツアー開催の継続を行い、参加者も教員や学生だけにとどまらず地域住民や自治体への周知も行って風化防止に対する意識拡大を目指していきたい。

特定非営利活動法人 相馬はらがま朝市クラブ

団体概要	
所在地	〒976-0042 福島県相馬市中村字塚田72
TEL	0244-26-9127　FAX　0244-26-6567
E-mail	info@somamirai.net
URL	https://www.facebook.com/somamirai

活動地域	相馬市
活動分野	社会教育 まちづくり 災害救援 経済活性化 その他

課題・背景

地震津波や原発事故により甚大な被害を受けた相馬地域は、震災から12年が経過した今もなお課題が山積している。昨今の新型コロナウイルスの感染拡大や2022年3月16日に発生した地震の被害も重なり、町は活気を大きく失っている。さらに、若い世代を中心に東日本大震災の風化が進んでいる現状もある。地域が直面している現状と課題を正しく認識し、課題解決と担い手の育成も視野に入れた住民全体での取組が求められている。

目　的

東日本大震災に加え、新型コロナウイルスの感染拡大や福島県沖地震など複合的な影響を受けている相馬地域の課題解決には、先ずは地域の住民や事業者が現状と課題を正確に認識することが必要である。そのために、震災からの復興状況や地元が抱える課題、住民が気になる疑問や課題等を常に最新のデータで伝え続ける。また、若い世代がデータブックの作成に関わることにより、震災の風化と将来を担う人材の育成を図り地域活性につなげる。

取組内容・実績

取組1

オープンデータブック「相馬INDEX 2022」Web版の作成とリリース

●相馬市のあらゆる分野の最新の現状を現すデータを収集し、発信

相馬市の労働力率や子どもの学力といった新規データを収集するとともに、住民が気になる疑問や課題等のデータを最新にアップデートし、「相馬INDEX2022」を作成。本年はWeb版に特化し、より多くの市民や支援関係者に情報を拡散しやすく、教育現場等における地域学習で活用しやすくした。

取組2

子育て世代とのデータブック作成＆活用による情報発信

●**相馬市内の子育て世代に「子育て情報」に関するアンケート実施**

昨年の取組において要望や声が多かった「子育て情報」に関するアンケート調査を0～18歳のお子さんを持つ方々に実施。その結果をデータとしてまとめ、「相馬INDEX2022」のWeb版で公表した。子育て環境を育むコミュニティや取組などに活かしていくことで、相馬市における子育て環境の向上に寄与することをめざす。

取組3

教育現場における地域課題解決や魅力発掘の実践による人材の育成

●**中学生による地域を発信するフリーペーパー作成＆発信**

総合学習と連携し、地元の漁業や農業について、フィールドワークやデータブックの活用を通しての学びをフリーペーパーにまとめ、生徒が地域の方々に発信した。

●**相馬市内全中学生に“あおさ”に関するアンケート実施**

地元の名産である、あおさのPRに向けた調査を実施。その結果や市内4校における座談会を通して、中学生が考えたPRアイディアを市民にむけて発表した。

事業の成果

●幅広い行政のオープンデータに加え、福島県や相馬市の関係者からの情報やデータの入手と解析により、正確な復興状況や子どもを取り巻く環境、それらの課題と相馬市の魅力等を見える化することができた。

●子育て世代へのアンケート調査を通して、子育てにおいて共通する困りごとや求めているものを見える化し、現状を明らかにすることができた。

●中学生によるデータづくりやデータの活用に留まらず、地域の大人との交流やアイディア及び学びの情報発信を通して、中学生が「自分でも地域に関わりできることがある」という気づきを得た。若い世代と大人との交流は、将来の地域を担う人材育成の一助となっただけではなく、住民の方々を活気づけ、地域課題への取組において新たなヒントになるなど地域活性に向けてのさらなる助走につながった。

今後の展開

●Webに掲載されたオープンデータをさらに多くの方に見ていただき、考えるきっかけをつくるために、Instagramなどを活用し、継続した情報発信を行う。

●オープンデータの作成と情報発信は、人々が持つ情報のアップデートにつながる意味で毎年継続することが重要であり、最新データに基づく住民や事業者同士の連携による地域活性を継続させる。

風評払拭を目的とした被災地と首都圏及び、海外を結ぶ体験交流活動と、風評払拭を推進する教育の仕組みづくりの必要性を首都圏の人々と共有する地域教育を考える勉強会

特定非営利活動法人 南相馬サイエンスラボ

団体概要	
所在地	〒975-0002 福島県南相馬市原町区東町2-50
TEL/FAX	0244-26-6286
E-mail	sciencelabo2011@gmail.com
URL	http://www.sciencelabo2011.com

活動地域	南相馬市･首都圏･バングラデシュ
活動分野	社会教育・まちづくり・農林漁村中山間・文化芸術スポーツ・国際協力・子どもの健全育成・科学技術

課題・背景

震災から12年が経過し、被災地の復興は進みつつありますが、他人の考えを信じることによって生まれる不安が原因とされる風評は今も国内外で続いています。私たちは被災地の未来をより明るいものとするためには、被災地の地域資源を活用した体験交流活動に加えて、知らないことを知ることや、日頃当たり前だと思っていることを、自分の目で見て自分の頭で考える教育の基本的な考え方を多くの人々に伝えることが重要だと考えました。

目　的

私たちは主に親子を対象に、被災地の農産物や地域資源を活用した体験交流活動を県内及び首都圏各地、そして親日国であり被災地の情報を求めているバングラデシュなどで実施することで、多くの人々に被災地の復興の情報を届けるとともに、首都圏において各自治体の教育関係者を招き、風評の払拭を目的とした「地域教育を考える勉強会」を開催することで被災地の未来のあるべき姿を提案したいと考え、様々な事業を実施いたしました。

取組内容・実績

取組1

11月20日（日）に東京でお米づくりへの理解を深めるための「お米ってなんだろう？」というワークショップを開催しました。南相馬市の親子が育てた稲を用いて、稲穂からご飯になるまでを体験してもらいました。初めて稲穂を見て、その匂いを嗅いだ親子は、脱穀・唐箕（とうみ）処理・籾摺（もみず）り・精米などを、目を輝かせて体験していました。最後に南相馬市産の新米を炊いたご飯を味見した親子は、その新米の美味しさに驚いていました。

取組2

年末年始にFuture Design Schoolの校長先生のお招きでバングラデシュを訪問し、親子科学実験教室「牛乳ってなんだろう？」「血液ってなんだろう？」を開催しました。体を使って学ぶことで本質に近づいていく授業はバングラデシュの子どもたちにも大変好評でした。被災地の復興の様子を伝えたことで現地の人々の福島県への理解が大きく広がったと感じました。ザイドル博士からは「次回はダッカ大学で授業を行ってほしい」と依頼されました。

取組3

2月12日（日）に川崎市・只見町・南相馬市の教育担当者をお招きし「第6回地域教育を考える勉強会」を開催しました。それぞれの地域の「地域学校協働活動」に関する取組が発表され、知らないことを理解することが感動や幸せを生み、風評払拭につながるとの理解が共有されました。

事業の成果

風評は他人の意見に左右されて生まれる不安が原因であり、その払拭には自分の目で見て自分の頭で考える自律的な学びの姿勢や新しい教育の仕組みづくりが必要だと私たちは考えています。その考えのもと、私たちは今年度、南相馬市での親子農業食育教室や、そこで採れたお米を用いた首都圏でのワークショップに加えて、親日国の1つであるバングラデシュでの風評払拭活動を行うことができました。東日本大震災は世界的にも日本の農産物等への不安を生み出し、貿易や人的交流にも影響を及ぼしているとされています。今回、私たちが常に心がけている「身近なものを科学する体験活動」は海外にも波及し、風評の払拭に大きく貢献することができたと思っています。また、私たちの活動の趣旨に賛同し、交流を続けさせていただいている各自治体の関係者が一堂に会した地域教育を考える勉強会においても、自律的な学びの必要性が共有されたことは重要なことだと考えています。

今後の展開

私たちの風評払拭を目的とした活動は南相馬市や首都圏など国内だけに限らず、今年度はバングラデシュへと広がり、国際的な取組に発展してきました。今後は国内での風評払拭活動をさらに進めていくことに加えて「日本の素晴らしい教育を取り入れるとともに、日本との交流を活発にして両国の発展に貢献したい」とするバングラデシュの人々の思いに寄り添う形で国際的な風評払拭活動を続けていきたいと考えています。

福島の魅力発信・課題解決に向けた大学生向けインターンシップおよびNPO等における復興人材獲得・育成力強化プロジェクト

特定非営利活動法人 コースター

団体概要	
所在地	〒963-8071 福島県郡山市富久山町久保田字下河原191-1
TEL	024-983-1157　FAX　024-983-1158
E-mail	info@costar-npo.org
URL	http://costar-npo.org/

活動地域	郡山市近郊・双葉郡
活動分野	社会教育 まちづくり

課題・背景

東日本大震災から12年経ち、ハード面の復興は進んでいるが、ソフト面の復興は十分ではない状況である。復興を担うプレーヤーが年々減少していること、被災者の年齢も高まったことから、ボランティアを含めた現場をつくることが困難になってきている。次世代の復興を担うプレーヤーの育成のために、先駆的に活動するプレーヤーのノウハウを継承しつつ、世代交代しても復興に携われる現場づくりを行う。

目　的

福島の復興に関わる人を増やすために、本県の魅力を発信すると同時に、既存のプレーヤーと共に活動することで、県内で今後の震災復興や新しい福島を担う大学生などの若手復興人材の輩出と育成を目的とする。また、実践型インターンシップを通して、復興活動に取り組むNPO等が若手人材を獲得し、復興のプレーヤーとして育成できるようそのノウハウを移管し、受入力の強化による復興促進も目指す。

取組内容・実績

取組1

●復興を担う経営者・プレーヤーの元での大学生向け実践型インターンシップの実施

夏と春の期間にそれぞれ2か月間のインターンシップのコーディネートを実施。17プロジェクトに対して43名の大学生が参加をし、福島のプレーヤーとともに福島の復興につながる事業づくりを行った。具体的には、酒蔵にてコロナ禍における酒蔵見学イベントの企画・実施や酒販店での新たな顧客開拓に向けた酒蔵とタイアップしたインスタライブの実施など、福島の復興や風評払拭活動のプロジェクトが行われた。

取組2

インターンシップのコーディネートを通して、受入団体に若手人材との指導法やコミュニケーションの取り方、若手人材を受け入れるためのプログラム開発の手法についてノウハウの伝授のための勉強会を行った。

事業の成果

- 過去の事業に参加したインターン生がコーディネーターとして活躍することになり、インターンシップが終わった後も福島に関わりつつ、次世代のプレーヤーを増やすために寄与する流れが生まれた。
- コロナ禍で実施できずにいた学生の双葉郡視察ツアーを再開し、福島の復興の現場を多く見せられたほか、プログラムの中で、双葉町の復興公営住宅に居住する被災者と交流する活動もでき、多角的に福島の今を見せることができた。
- 双葉郡の連携先（外注先）ができたことで、双葉郡での活動の現場を増やすことができた。
- 企業向けの勉強会を開催し、受入先候補を増やすことができた。

今後の展開

- 引き続き、県内全域でのインターンシップや高校向けの取組を実施していく予定である。
- また、仲介的な役割だけでなく、今後、復興公営住宅や双葉8町村でPRイベントや住民と若者をマッチングしていく事業も行っていくことで、直接・間接事業を含め、福島の復興と魅力を発信していく事業を行っていく。

特定非営利活動法人 野馬土

団体概要	
所在地	〒979-0006 福島県相馬市石上字南白髭320
TEL	0244-26-8437　FAX　0244-26-8203
E-mail	info_nomado@fork.ocn.ne.jp
URL	https://nomado.info/

活動地域	相双地区
活動分野	まちづくり 観光振興 農林漁村中山間 環境保全 経済活性化

課題・背景

県内へ来訪する視察・観光客は、長引くコロナ禍の影響で下げ止まりを見せている。特に旧避難地域においての産業や賑わいを生み出し帰還者や移住者の増加と定着を目指す中での課題は深刻である。依然として残る風評や記憶の風化、県内地域間の格差や分断に加え、令和3年2月に続く令和4年3月の福島県沖地震と度重なる被害に喘ぐ当該地域の疲労度は増幅しており、生業そのもののダメージが大きい中で、再生と回復への糸口となる取組を留まることなく進める必要があると考える。

目　的

これまで実施の県内在住者対象モニターツアーでは当該事業の継続と発展への期待の声が多く寄せられ、現地をシル・フレル行程、福島の素材でツクレル体験への評価は高まっている。招致PRを行った東京イベントでも関心度は高く、オンライン広告の反響にも手応えを得ている。全国旅行支援を筆頭に行動規制の緩和による需要に対応するべく、わかりやすい案内窓口と昨年度までの成果コンテンツを集約した特設サイトを擁しアピールを強めていく。また、帰還者・移住者である地元住民の方を対象に地域の魅力に触れる企画を実施し、当該活動への理解醸成と交流拠点づくりを同時に目指す。

取組内容・実績

取組1

県外在住者や地域の小学生親子、福島大学生を対象にそれぞれモニターバスツアーを実施。前回のモニター結果を精査しコース設定・時間配分など参加者目線の意見を取り入れた新しい企画でモニタリングと広報撮影を行った。県外在住者対象のコースでは初めて宿泊を加えた行程で企画。新たに宿泊施設との連携が生まれ、訪問先など地域のつながりも深めた。親子向けは地元各町村教育委員会の後援のもと夏休み期間内に実施。

取組2

内容の紹介と問合せ・予約窓口を集約した特設サイトを新設。実際の来訪計画や問合せに対応する窓口を設置しわかりやすくした。さらに、ふくしま全体のPRと本サイトの周知を軸にしたオンライン広報の手段として新たにTikTokチャンネルを開設したほか、来訪促進と県産品の物販を兼ねた首都圏イベントへのブース出展を年3回実施。感染状況の変化等、再度往来が厳しい事態となっても発信が進められる仕組み作りを目指した。

取組3

ものづくり体験会場である小高区金谷グリーンヴェイルドを地域の方に紹介し、人気コースを体験する交流企画を年4回実施。地元のお米を楽しく食べる「飾り巻き寿司」や、ふるさとの情景を描く「ハーバリウム」づくりを体感。住民間のコミュニティスペースとしての利活用を目指し、帰還者と新規移住者が気軽に参加できる場づくりから、県産品を素材に活かした作品づくりと生産背景に触れることで地域の魅力を再発見できる機会とした。

事業の成果

長引くコロナ禍により実際の来訪者が下げ止まっている中で実施を重ねたモニターツアーは、運営体制の確認やレビュー収集、広報素材の撮影にも寄与した。補助金活用による無料開催のインパクトは大きく、DMへの反響や広告配信のリアクションも大幅に上昇した。

PRの成果を実際のエントリーに結びつけることに特化した申込窓口と説明コンテンツを配した特設サイトを新規に整備できたことで、始動したSNSコンテンツを糸口に若い年齢層の関心拡大が期待できる。

ものづくり体験での地元交流企画は反響が大きく、どの回も募集開始直後に満席になってしまい不満の声があがるほどであった。当該事業は県外向けの発信に特化した面が強く、同じ地域の方や県内の他地域の方からは疎外感や分断意識があると指摘も受けてきたが、地域の方にも喜ばれるための理解醸成が一歩進んだと感じる。

今後の展開

3年がかりで注力してきた旧避難地域への招致活動だがコロナの動向に翻弄され続け成果が見えてくるのは今後次第と考える。昨年地震被害を受けた当地域の負担は依然大きく、地域と生きる団体としての真価が問われるのはこれからと自負している。自治体や目的を共にする団体と連携したDMO等の協働を目指し、SDGsツーリズムのサポート窓口としての役割を模索していく一方で、帰還者・移住者の拠り所としての機能も備えてまいりたい。

農業復興に向けた都内在住高校・大学生と生産者との交流体験及び情報発信事業

特定非営利活動法人 OYAKODOふくしま

団体概要	
所在地	〒962-0062 福島県須賀川市山寺町82
TEL	090-6040-8847
E-mail	tetsuyashidara@hotmail.com
URL	https://www.facebook.com/oyakodo.fukushima

活動地域	福島県・東京都
活動分野	社会教育 まちづくり 農林漁村中山間 男女共同 子どもの健全育成

課題・背景

震災から12年が経過した今もなお、未だ根強く残っている風評の影響は、福島県農業算出額が震災前の水準に戻らないことからも明らかで、震災は福島県内における農水産業従事者の高齢化や新規就業者の減少など、農水産業及び地域の衰退に拍車をかけている。

また、首都圏においては福島県産食材に向けたイメージの回復を図れないまま震災の風化が進んでおり、福島復興のために風評払拭にむけた正しい情報発信と消費者の理解が求められている。

目　的

都内在住の若者が福島の生産者の元を訪れて農作業体験や農作物を使った調理体験などを通して、県産農水産物の魅力やおいしさ及び食の安全性についての理解を深めるため体験ツアーを実施する。

また、そこで学んだことを動画にまとめ、首都圏で県内事業者の想い及び農水産物の美味しさをPRするためのイベントを実施することによって県産農水産物に対しての理解を促進し、次世代を中心に福島県産品の消費拡大につなげていくことを目指す。

取組内容・実績

取組1

都内在住及び県内在住の若者が、福島県浜・中・会津各地域の生産者をはじめとした農水産物を扱う事業者から県産農水産物の安心安全に向けた取組や想いについての話を伺ったり、農作業や調理体験など実際の現場で体験を伴った交流を行ったりすることによって、若年層の震災風化を防ぎ、県産農水産物に対する理解促進のための取組を行った。

取組2

取組1での活動をもとに、生産者が取り組んできた安心安全の取組や、それに向き合う県内事業者の想い及び県産農水産物の美味しさを伝える動画を作成した。そして、その動画を活用して県産農水産物の魅力・美味しさをPRするためのイベントを都内で実施することによって県産農水産物に対しての理解を促進し、次世代を中心に県産品の消費拡大につなげていくための取組を行った。

事業の成果

延べ約150名の若者が、実際に生産現場を訪れて、農作業を行ったり食に関わる事業者と交流を行ったりするなど、農水産物のリアルに触れる体験を通じて福島の食の安全性や美味しさなどの魅力を直接感じてもらうことができた。

中には初めて福島を訪れる大学生もいたが、泥だらけになりながら夢中で取り組んだ農作業や地元の方々との交流が心に残り、大学の夏休みや春休みなどの長期休みを利用して何度も福島を訪れるリピーターへと成長した。

また、体験の様子や生産現場の様子をまとめた動画を作成し、都内で食を交えた上映イベントを行った際には首都圏に在住している方から「これまで関心を向けてこなかった野菜や水産物に興味が湧いた。これから福島産のものを見つけたら自分でも購入して調理してみたい」という声も聞こえてくるなど、消費拡大に向けた購買意欲の増進へとつなげることができた。

今後の展開

作成した動画をオンライン上で拡散し広く福島の食の魅力を知ってもらうことに加え、今回事業取組2で行ったように、実際に生産現場の様子を映像で伝え交流をしながら福島の食材を味わう機会を定期的につくっていきたい。

富岡町の「明日」を創るコミュニティ形成事業
～多様な居住者をつなぐ表現活動の実施～

特定非営利活動法人 富岡町3・11を語る会

団体概要	
所在地	〒963-8017 福島県郡山市長者一丁目7-17 さくらビル3階302-2号室
TEL/FAX	0240-23-5431
E-mail	kataribe_office@tomioka311.com
URL	http://www.tomioka311.com/

活動地域	富岡町
活動分野	社会教育 まちづくり 文化芸術スポーツ 子どもの健全育成

課題・背景

避難指示解除の区域が広がり、11年目に我が家に宿泊が許される町民もいる中で、町の居住者数は、相変わらず伸び悩んでいる。「生活環境の不便さ」、「原発や放射能への不安」などの理由を越えて、「住んでみたい町」になるためには、何が必要か？「信頼し安心できるコミュニティ」の形成こそが、最も重要であると考える。多様な居住者が心を通わせるためには、表現活動によるコミュニケーション力の向上を図る事業は欠かせないと考える。

目　的

取組の目的は町外に暮らす町民、帰還した町民、新たに町に移住した新住民と町に関わる人間の多様化はますます進む。町への思い、立場、価値観の違う人々が、互いを理解し合うための「つながり」を作るためにコミュニケーション力を培う表現活動を展開し、町の「明日」を創るコミュニティ形成に取り組む事が重要であると考える。

取組内容・実績

取組1

富岡町内居住者の表現力を育成向上させる目的で継続している音読教室は、町外からの参加者もあり、その輪は広がっている。芸能祭や伝承祭で発表する場もあり、発信することの喜びを知り連帯感や達成感を味わう場ともなった。心身の健康につながり町内居住者の交流の場にもなっている。

子ども対象の表現塾は、町企画課との連携で、年計6回の町民向けの「防災無線」での放送を小学生が行う。4年間継続しているが、発声発音文章の読み方が明瞭になり、町での役割を果たしているという意識や保護者などから褒められる喜びを感じている。

取組2

演劇キャンプinとみおか2022を富岡町文化交流センター学びの森において開催。4つの講座から1つ選び、2泊3日の中でワークショップなどを行い最終日に成果を発表する。演劇・ミュージカル・講談・殺陣といった演劇的な手法を活かして表現力を伸ばし、参加者同士の新たな人間関係を構築する場となっていった。また、町外からの参加が多い中、富岡町内で開催することで参加者が被災地の今を見て感じて学ぶこともでき、発表を見にきた地元住民と交流する機会にもなった。

取組3

富岡演劇祭2022では、平田オリザ氏、合田哲雄氏という中央の演劇界、行政で活躍する登壇者を迎えてのシンポジウムを開催し「演劇で町は元気になるのか」という核心をついたテーマの意見交換をしたほか、町民参加のオープニング、全国からエントリーした劇団などによる上演、大道芸が3日間にわたり繰り広げられた。ボランティアスタッフ、観客も町内外から集まり、演劇を通し人のつながりを実現した。

事業の成果

継続している表現塾と演劇キャンプは町内外からの参加者が増え、発表の場もあり、参加者は発信することの楽しさ、表現することの大切さを感じている。

今年度新しい取組として「富岡演劇祭」を開催したが、震災後の避難生活によって失った人のつながり、町の賑わいを取り戻そうという目的は、ある程度果たせたかと考える。3日間で会場となった学びの森への入場者は1,000名にのぼり、特にオープニングセレモニーでは、町内の子どもから高齢者までが舞台で町の元気を繰り広げた。上演団体17、スタッフ40名（内30名ボランティアスタッフ）、演劇になじみの薄い地であったが、演劇の面白さ、人の集まる楽しさに正真正銘「町は元気な3日間」になっていた。

今後の展開

「町の復興は、人のつながりをつくることから始まる」という考えのもと、被災地である町を様々な表現で伝えていく事業を展開していく。まず表現塾では、対象、内容、時間帯などを工夫し、より多くの人の参加をめざす。また、演劇キャンプについては、多様な表現活動との出会いの場、参加者・講師同士のつながりをつくる場、町に住んで劇作りをしたいと思う人の活動につなげる場として継続していきたい。そして、富岡演劇祭については、町民参加・地域の伝統芸能・演劇の発表をメインにし、地域文化の活性化を図る。さらに、「観劇の楽しさ」「創作する」「上演する」楽しさを主眼として、「演劇を観る町」から「演劇を創る町」へと発展することで町への定着を図る。

特定非営利活動法人 Global Mission Japan

団体概要	
所在地	〒970-8026 福島県いわき市平字尼子町2番地の7
TEL	0246-23-5490　FAX　0246-23-5492
E-mail	info@globalmissionjapan.com
URL	https://www.globalmissionjapan.com

活動地域	浜通り
活動分野	まちづくり 文化芸術スポーツ 災害救援 地域安全 国際協力

課題・背景

東日本大震災・原発事故からの復興は着実に進捗してインフラの整備は整い、以前に比べれば安心感は漂ってきました。

しかしながら地域住民、関係機関の尽力にもかかわらず、遅々として人口回復は進まず、それぞれに思い煩い、心が満たされない方々がいるのも現実です。

人と人とのつながりを作り出す必要が、いっそう求められています。

目　的

取組の目的は当団体のカルチャーサークルを通して、被災者の方々にやりがい・生きがいを得てもらい、文化的に潤いのあるまちづくりにつなげることです。人口減少で思うように活動のできない地域コミュニティーに集いのきっかけを提供して、つながりを確かなものとしていきます。

取組内容・実績

取組1

心とからだの健康づくりをめざした太極拳教室を定期的に巡回開催しました。

浪江町、川内村、広野町で帰還住民の方々と実施しました。

いわき市内では、浪江町、双葉町、富岡町などからの避難者の方々と各町の交流サロンで開催しました。また公民館などを会場に定住された方々と地域住民との交わりも活発に行われました。

10会場で180回実施しました。

取組2

コーラスを愛好する仲間を集めてコーラスサークル活動を実施しました。三つのサークルが生き生きと練習に励んでいます。

練習を重ねるたびに上達して、やりがいを感じてもらいました。

地域の芸能祭に参加挑戦しました。

総開催数は59回実施しました。

取組3

大人のかんたん英会話と称して、楽しい学び直しの場を作りました。

外国人講師と共に海外と日本の文化の違いに驚き、笑いの中に同郷者のきずなが強まりました。

富岡町交流サロン、浪江町交流サロンを会場に、21回開催しました。

事業の成果

自主財源も用いた年間を通した事業であり、本補助期間においても計画通りに遂行できました。

継続した取組は参加者のつながりを強めるだけでなく、積極的な個々の向上心が育まれて、生き生きとした生活を過ごされています。

太極拳・コーラスサークルは地域の芸能祭などにも出演して、多くの方々にその成果を披露しました。明るく力強いエネルギーの発露は地域の活性化を促すことに、大いに期待することができました。

今後の展開

これまでの実績を継続し積み重ねることは勿論のこと、各取組参加者が主体的に地域行事に企画参加できるように、後押ししていきます。

地域文化の種を蒔き続ける活動が私どもの使命と考えています。

音楽療法による復興支援 IN 福島 2022・コミュニティの賑わいの創出

特定非営利活動法人 音楽療法NPOムジカトゥッティ

団体概要	
所在地	〒761-8031 香川県高松市郷東町792-84
TEL/FAX	087-882-0201
E-mail	musicatutti1259@live.jp
URL	blog.canpan.info/musicatutti　www.musicatutti.com

活動地域	福島市・二本松市・浪江町
活動分野	保健医療福祉・社会教育・まちづくり・文化芸術スポーツ・災害救援・人権平和・国際協力・男女共同・子どもの健全育成

課題・背景

音楽療法による東日本大震災からの心の復興事業を2011年から400回、実施継続してきた。道路、建物などハード面は復旧が目覚ましいが、心の復興は遅れており、高齢者、障がい者など、弱い立場にある人々が置き去りにされている実態を見てきた。誰もが、その人らしく前向きに生きられるような支援プログラムの確立、支援スタッフ育成が課題である。

目　的

音楽の持つ人間性を回復させる力を用いて、人々の支援をするのが音楽療法である。

当法人独自開発の【音楽療法とアフリカンリズム統合プログラム】を用いて、福島市内、二本松、浪江町などで、乳幼児親子から高齢者まで、誰もが達成感、有能感を感じることができる音楽交流の場を構築し、コミュニティの真の賑わいを創出することを目的とする。

取組内容・実績

取組1

こむこむにおける誰でも参加できるアフリカンドラム・ワークショップ

音楽療法士の多田羅と、劇団四季ライオンキング初代打楽器奏者BBモフランと共に、ジェンベ、ドゥンドゥンなどのアフリカンドラム演奏やアフリカンダンスを体験し、分け隔てのない音楽によって交流した。(9月から2月まで毎月開催、計6回)

取組2

交流音楽会

多田羅とモフランのピアノ、歌、アフリカンドラム、アコーディオン、鍵盤ハーモニカなど多彩な楽器による演奏に触れ、音楽の喜びを体験した。3月12日には、さらに2名の奏者を招へい、こむこむ館にて200名の市民参加の交流音楽会を開催した。

とっておきの音楽祭（福島駅西口）、NPO青い空コンサート（立子山自然の家）、いこいの村なみえ、チェンバ大町、こむこむホールなどで計8回開催。

取組3

アフリカンドラム体験ワークショップ

多田羅とモフランによるアフリカンドラム、アフリカンダンス体験ワークショップ。楽譜を一切使わないので、誰もが苦手意識なく音楽体験し交流できた。

二本松支援センターden東こども園、キッズハウスりんごっこなどで7回開催。

事業の成果

2011年から音楽療法による活動を宮城県を中心に継続しており、久しぶりに福島で事業を実施した。宮城で出会った人材が、福島でも積極的にサポートしてくれ、福島市や地域団体との連携も深まり理解者も拡大できた。当法人のような音楽療法の専門性に根差した支援は全国的に例がなく、企画から実施まで、委託を一切せずNPOが担っていく例も先駆的であるので、社会認知も低い中で良く健闘したと思われる。

今後の展開

当法人の実施している手法は先駆的で、国内の音楽療法界でも実践例がない。事業を担える専門性をもったスタッフ育成までは難しいが、理解者、支援者の輪が拡大できたので、今後も学際性、コミュニティ支援の視点を強化し、継続していきたい。

NPO法人 ななうらステーション

団体概要	
所在地	〒869-5461 熊本県葦北郡芦北町芦北2739
TEL	0966-61-3100　FAX　0966-61-3103
E-mail	nanauraashikita@gmail.com
URL	nanaura-ashikita.org

活動地域	熊本県
活動分野	まちづくり・観光振興・文化芸術スポーツ・災害救援・男女共同・子どもの健全育成・その他

課題・背景

東日本大震災のような甚大な災害でも人々の記憶は薄れていきます。しかし、原発事故の影響による福島県、特に沿岸部の人や海産物への偏見はいまだ続いています。また、山間部の食や生活へも影響があります。コロナ禍で人の往来が制限された中で、さらに福島県へ行ってみたいと思う機会が少なくなっているのではないか、と思います。

目　的

歴史や伝統もあり、食も豊富な福島県の魅力を、熊本県内で行う物産や文化交流イベントや情報の配信等を通じて、福島県・熊本県内外の人々にアピールできる場を作り、人と人の交流から生まれるお互い様の気持ちや、一緒に新しいものを作り上げていくきっかけとなることを目的とする。

取組内容・実績

取組1

福島県を身近に感じる・福島県とつながるサイト制作

つながろうFortune Island（tsunagaro.com）

- 福島県民や福島県外の人とのITを活用した交流の場づくり
- 冊子の制作
- 福島県内の食の生産者や伝統文化の担い手を紹介
- 伝統文化、お祭りのYouTube配信
  つながろうFortuneIsland - YouTube

取組2

福島マルシェ Fortune Island マルシェ

- 様々な商品の生産者と消費者とをつなぐ直接交流の場づくり、福島県の特産品販売
- 福島県の伝統芸能、祭り、観光案内など一緒に紹介
- 新規につくる福島県とつながるサイトにて福島県内の様々な団体とつながる

つながろうFortune Island（tsunagaro.com）

取組3

人の関心・興味を引き付けるステージイベント

- **フラダンス**
  映画にもなった「フラダンス」で興味関心を引き寄せる
- **じゃんがら念仏踊り**
  福島県内の伝統文化、お祭りを紹介。観光交流の機会を増やす
- **「つながろうFotune Island」ホームページやYouTubeをご覧ください。**

つながろうFortune Island（tsunagaro.com）
つながろうFortuneIsland - YouTube

事業の成果

- いわき市から来られた人たちが、こんなに声をかけられると思わなかったと驚いていた。
- 物産販売も賑わい、準備された商品は完売してしまった。
- 次回は、ぜひ福島県全体から来ていただきたい、という声をたくさん頂いた。
- オンラインショップQRコードや特産品・商品に対して、いろんな声を頂いたので、各地の担当の方へお伝えした。
- 往来の熊本の人と福島から来た人たちが話をしている姿をあちらこちらで見ることができ直接交流の良さを感じられた。
- 集客や観光PRのため、福島県のいわき観光まちづくりビューロー・会津若松観光ビューローから商品を頂き抽選会を行った。お友達LINE登録という条件を付けたところ270名の登録があった。
- 2日間の開催中、今回作成した冊子1,500冊、ほぼ全て配布することができた。

今後の展開

- 今回熊本に来られなかった行政の方から、次回は参加したいという声を頂いておりますので、このような交流イベントを継続していく方法を考えていきたい。
- 福島と熊本が被災地同士ということだけでなく、歴史文化的にも人的にも、様々な交流が広がるよう学びという場も必要だと思いました。

葛尾村における祭および郷土芸能等の文化伝承をきっかけにしたコミュニティー再生事業

一般社団法人 葛力創造舎

団体概要	
所在地	〒979-1602 福島県双葉郡葛尾村大字落合字夏湯134
TEL/FAX	0240-23-6820
E-mail	info@katsuryoku-s.com
URL	https://katsuryoku-s.com/

活動地域	葛尾村
活動分野	まちづくり

課題・背景

- 2022年6月12日、帰還困難区域に指定されていた葛尾村野行地区の一部で避難指示が解除された。帰還するのは2世帯の高齢者世帯。葛尾村ではもともと宝財踊りという伝統的なお祭りがあった。しかし、帰還した村民からは、以前のようなコミュニティーが失われているため祭りの開催を諦めざるを得ないとの声があった。コミュニティーがなくなり、郷土芸能が行われなくなっている。郷土芸能がなくなり地域のアイデンティティーが薄れ、コミュニティーの崩壊が加速するという悪循環が進んでいる。
- 一方で新しい住民が増えているが、葛尾村の地域文化（アイデンティティー）がわからないので新旧住民の価値観の違いによるハレーションが起き始めている。

目　的

- 原発事故により、コミュニティーの崩壊（人口的意味）と葛尾村の地域文化の崩壊（アイデンティティー的意味）の悪循環が続いている。葛尾村の住民の心のよりどころがなくなり始めている。
- 移住者は増加しているが、地域文化が伝承されていないため、移住者ともともとの住民でのハレーションも起き始めている。
- また、地域文化（アイデンティティー）が継承されなければもう元の葛尾村ではない。
- 移住者やもともとの住民を巻き込んで、祭りや伝統芸能の文化振興をきっかけにコミュニティー再生が必要と考える。

取組内容・実績

取組1

- 祭及び伝統芸能の調査及び保存
  葛尾村の祭りや郷土芸能伝承者へのインタビューを行い、冊子を作成し、電子媒体で配布する。八幡神社総代会、宝財踊り保存会、三匹獅子保存会、岩角獅子舞保存会などを対象とする
- 祭及び伝統芸能の伝承活動
  もともとの住民と新しい住民の祭りや伝統芸能を通した文化伝承交流を行う。具体的には、伝統芸能の宝踊りの踊り方教室を実施していく
- 祭及び伝統芸能の実施
  実際に祭り（八幡神社秋祭）をもともとの住民と新しい住民とで実施し、アイデンティティーの伝承や関係構築の機会をつくる

事業の成果

元々は村民しか祭りに参加できない風潮であったが、外部の人も気軽に参加できるように、周辺の高校生や大学生、また日本の祭りに興味のある周辺の社会人なども巻き込めるような祭りにし、葛尾村のコミュニティーを強化していくことができた。

また、周辺の神社関係者や國學院大學関係者などの本格的な祭りの主催者や関係者に話を伺い、祭りの質を上げ、将来的には多くの人が訪れるような村の名物イベントのひとつとして復活することができた。

今後の展開

事業実施に関して、これまでの記録の消失があった。前回の実施が40年前のため実施者が死亡していたり、記録されたものが紛失したりしていた。

今後に向けては、お祭りの関係者に聞き取りを行い、伝承をしっかり行っていくことが必要だと考えている。

東北～北海道ブロック広域避難者支援団体
情報交換・研修会および合同視察会の開催

一般社団法人 東北圏地域づくりコンソーシアム

団体概要	
所在地	〒984-0065 宮城県仙台市若林区土樋254 ニューメゾン土樋201
TEL	022-353-7550　FAX　022-397-7230
E-mail	info@tohokuconso.org
URL	http://tohokuconso.org/

活動地域	東北地方及びその隣接道県
活動分野	まちづくり 災害救援 連絡助言援助

課題・背景

震災から12年が経過し、避難者を取り巻く社会環境が大きくは変化しなくなってくる中、広域避難者への支援活動は多様な意味での当事者の“自立”に向け、平時の仕組みへの移行を含め、持続可能な仕組みにどう収束させていくか考える転換点に入ってきている。長期にわたる広域避難者支援のプロセスを丁寧に振り返り、地域を超えた検証・共有を行うことが、今後発生する大規模災害に備えるためにも重要になっている。

目　的

本事業の対象地域においては、広域避難者を受け入れた側の自治体・社会福祉協議会・NPO・当事者団体・中間支援組織等による支援活動が、それぞれ地域毎に多様な仕組みにより展開されてきた。これら広域避難者支援に関わってきた団体・機関の関係者が集い、支援の現状・課題を地域を超えて共有しながら、合同で研修や被災地域への視察を行うことで、上記課題の解決につなげることを目的とする。

取組内容・実績

取組1

広域避難者支援団体間情報交換会の開催

広域避難者支援団体・機関の担当者が集い、支援の現状について共有し、以下のテーマで支援プロセスを振り返る情報交換会を3回、宮城県仙台市内にて開催した（Zoomミーティングを併用、オンライン参加も可能とした）。

（1）10月28日（金）　初動期の支援について
（2）1月27日（金）　自治体や社会福祉協議会の役割について
（3）3月3日（金）　中間支援の重要性について

取組2

広域避難者支援団体　合同視察会

広域避難者支援の担当者が、今後の支援活動をより充実させていくために、原子力災害被災地の現状を見、復興に尽力する方の声を聞く現地視察会を2回行った。

(1)10月29日(土)　川俣町山木屋～浪江町津島～道の駅なみえ～東日本大震災・原子力災害伝承館～請戸小学校

(2)1月28日(土)　中間貯蔵工事情報センター～東京電力廃炉資料館～とみおかアーカイブ・ミュージアム～大熊町復興拠点

事業の成果

3回の情報交換会を通じて、参加支援団体・機関の12年目における活動状況や、活動の課題、支援対象である広域避難者の抱える課題が、地域差を含めて共有することができた。加えて、3つのテーマを設定し、これまでの活動を振り返る機会を持てたことで、それぞれの地域での支援活動の特徴、地域による支援体制の違いとその意味といったことについて、一定の理解を深めることができた。

また、2回の合同視察会を通じ、帰還困難区域内を視察する機会を多く持つことができた。福島県外の報道ではなかなか見ることのできない被災地域の現状・課題、その中でも復興に向けて歩みを続ける地域の様子をよく知ることができた。

この2つの取組を通じて、事業の中で広域避難者に対する際の対応の幅が広がり、更に深く支援していくことができるきっかけを得ることができたと評価している。

今後の展開

参加団体・機関、それぞれの地域での活動内容・プロセスは、今後の広域災害発生時における避難者支援のあり方に大きな示唆を与えるものとなっている。今後も継続的に情報交換会や視察会を開催しながら、例えば、「発災後この時期にはこういった支援が大切になり、こういった内容が大切だった」といったように、今後の災害に活かすことのできる教訓を分析・整理し発信していくことにも取り組んでいきたい。

一般財団法人 ワンアース

団体概要	
所在地	〒301-0003 茨城県龍ヶ崎市平台4-20-6
TEL	090-9230-8586　FAX　0297-65-2885
E-mail	info@the-one-earth.org
URL	http://www.the-one-earth.org/jp/

活動地域	福島県・東京都・大阪府・兵庫県・石川県
活動分野	まちづくり・観光振興・農林漁村中山間・文化芸術スポーツ・国際協力・子どもの健全育成

課題・背景

津波及び原発事故からの復興の取組も12年目となり、なりわい・にぎわいの再生とともに、福島の農産物、花、そして日本酒などの県産品が、風評を乗り越えて全国的にも再評価されつつある。そのような今だからこそ、これらをさらに強く県外にアピールしつつ人の交流を創出する機会が増えて欲しい。本事業では、東北復興宇宙ミッションで宇宙ブランドを獲得した県産品を活用し、効果的な県外との交流創出と風評払拭を図ることを目指す。

目　的

上記課題解決に資するため、宇宙県産品の中から、復興アピールや地域交流につながりそうな有望アイテムを使って県外との交流を創生する目的で、今回は次の4つの取組を行うこととした。

(1)「宇宙酒」を県外にアピールする
(2)大熊町と石川県の子どもたちの「宇宙ヒマワリ」交流を創出する
(3)浪江町と淡路島の「宇宙タマネギ」交流を創出する
(4)須賀川市と宝塚市の「宇宙牡丹」交流を創出する

取組内容・実績

取組1

宇宙酒の県外アピール

東京・笹塚駅前のショッピングセンター21で試飲販売会を行い、首都圏の皆さまに大いにアピールした。民報＆民友両紙にも掲載された。同ショッピングセンターからは継続を熱望され、すでに令和5年度の試飲販売会も決定している。さらに、ECC国際外語専門学校様の福島県復興支援チャリティカフェ・ラポール（R4ふるさと・きずな事業）に宇宙酒を出品させていただき、関西方面の来客にアピールした。

取組2

大熊町と石川県の子どもたちの交流創出

大熊町民が育てる宇宙ヒマワリを石川県小松市のコマツHAPPYMELODY児童合唱団に贈呈したところ、子どもたちからヒマワリの栽培報告が届いた。2022年12月、小松市を訪れ、同合唱団の演奏会の舞台で感謝の意を述べた。さらに、小松市教育委員会、同観光交流課、市議会副議長らに、これまでのご縁と経緯を説明し、今後の交流を提案した。

取組3

浪江町と淡路島の「宇宙タマネギ交流」の創出

復興再生のシンボルとして宇宙タマネギ「浜の輝き」生産に取り組む浪江町と、タマネギの本場淡路島の交流を創出した。浪江町のタマネギ生産組合代表（松本理事長、阿部顧問）を淡路島にお連れし、今後の「淡路宇宙タマネギ」の贈呈と交流を守本憲弘・南あわじ市長に申し入れ、快諾された。さらに、淡路島の有力農家や農協などを視察し、今後農家同士の直接交流ができるようにした。

事業の成果

宇宙酒のアピールにおいては、宇宙関係者のSNSでも話題になるなど、首都圏でその知名度を上げることに成功した（福島民報＆民友両紙でも大きく取り上げられた）。さらに、同じきずな事業を進める大阪のECC国際外語専門学校様とのコラボが成立し、タレント・なすび氏のラジオ番組含め、大阪地区でも強力にアピールできた。

淡路島とのタマネギ交流は、守本憲弘南あわじ市長の全面協力が得られ、濃密で継続的な交流関係が確立され、生産者同士の直接対話ルートも拓かれた。NHKニュースでも大きく報道され福島のアピールにつながった。

小松市の児童合唱団との交流は、県外の子どもたちからの便りを見た関係者を喜ばせたため、今後も続けるとともに、対象を県内全体に広げていきたい。

宝塚市との交流は、コロナの影響で訪問が叶わなかったため、両市部長クラス含めたリモート会議を開催し、今後の交流の進め方を意識合わせすることができた。

今後の展開

今後は、宇宙ミッションを実行したワンアース独自のネットワークを活かし、元気に復興していく福島の姿、とりわけ次世代の子どもたちの姿を発信するためのイベントを計画する。

東京及び関西方面での「集客を伴う物産アピール」も行い、福島の宇宙物産振興と風評払拭に貢献したいと考える。

From Fukushima ふくしまを正しく伝える写真パネル巡回展～大地と人の力～

認定特定非営利活動法人 未来といのち

団体概要	
所在地	〒963-8041 福島県郡山市富田町字町西38-1-203
TEL	080-5386-1373　FAX　03-3774-2997
E-mail	koniclin_yk@yahoo.co.jp
URL	http://miraitoinochi.org/

活動地域	福島県・東京都
活動分野	文化芸術スポーツ 災害救援 その他

課題・背景

東日本大震災で地震、津波、原発事故の被害を受けた地区の情報は少ない。そのため福島県全体が放射線被ばく地域と概念的にとらえられてしまい、物産や観光地の安全性を表示しても懐疑的に受け止められて風評につながる。また避難者は、故郷の地名が人から忘れられてしまうかもしれないという不安から精神的にも疲労し、帰還が可能になっても踏み出せないこともある。

目　的

広い福島県のどこが避難区域になっていてどのように管理されているのか、その地域内の個人目線の出来事を伝える。それにより提示する情報の信用も高め、福島県が示している作物や観光地などの安全性を懐疑されないようにする。震災の記憶を保全する事で、被災者にとっても多くの人に自分たちの苦難を共有してもらうことができる。被災者が前向きになれれば地域に根差した復興にもつなげられる。

取組内容・実績

取組1

ふくしまを正しく伝える～大地と人の力

文化、歴史、地域社会、大自然、被害状況の写真や資料等を収集し、地域住民の証言に基づいたパネルを78枚作成。東北の中心の仙台、当事者の福島、首都圏東京で展示した。コロナ禍でも開催ができるようにwebの展示もあわせて実施し、情報発信に努めた。県内の物産品やホープツーリズムなどの取組も、見本や冊子で展示紹介した。

取組2

取組1で作成したパネルの内容を冊子にした。パネル展の来場者や関係希望者に配布し、拡散の協力と更なる理解を促した。パネルの内容を時間をかけて見ることができて理解を深めやすく、様々な撮影者から提供された写真や地元住民の言葉も事実をよく伝えていると評価された。

取組3

伝統芸能公演

浪江町南津島の芸能保存会の協力で、神楽ひょっとこ、田植踊を福島市と仙台市のパネル展会場で公演。仙台では伝統芸能研究の第一人者の懸田弘訓先生が解説。福島県の文化の魅力を伝え、若い世代にも関心を促した。3月末には東京都内の大学で、子どもにも伝わる朗読や、被害状況や復興についてのパネルディスカッションを行った。当日の様子を収録したものを、今後webで公開予定。

事業の成果

取組1： 福島県全体の特徴、東日本大震災後の浜通りを中心とした避難区域の様子を浅く広くではあるができるだけ正しく伝えられたと考える。アンケートにも、風評の払拭につながり、活動を継続してほしいという声があった。また、巡回展の来場者から展示物産品の販売場所を多く聞かれたほか、若い世代の人たちからは「ともに福島について考えていきたい」と声をかけられた。

取組2： 品質の高いパネルとともに冊子を作ることができた。来場者の中には近所の避難者や若い世代、外国の方に配布したいと冊子をまとめて持ち帰る人もいた。

取組3： 伝統芸能の力を借りて、多くの人に福島県の魅力を伝えられた。また今回のイベントを契機に福島県物産を購入していくと話す来場者もいた。

今後の展開

記録を残して、地域住民が言葉を持ち寄り、移り行く故郷の様子を伝えながら、その地で生活をしていく人たちのことを思いながら、今回のような事業を続けたい。毎年の新たな変化を記録として追加していきたいと考える。また、作成したパネルの連携団体などへの貸し出しを本事業終了後の4月頃から行いたい。

「までいな家」をみんなの家に
一飯舘村民と大学生が協働する飯舘村復興を目指す3つのプロジェクト

一般財団法人 飯舘までい文化事業団

団体概要	
所在地	〒960-1106 福島県福島市下鳥渡字扇田30番地の3
TEL/FAX	024-597-6800
E-mail	tarotaro@furusato-bunka.jp
URL	https://furusato-bunka.jp/

活動地域	福島県・台湾
活動分野	まちづくり 観光振興 農林漁村中山間 文化芸術スポーツ 国際協力

課題・背景

震災から12年が経ち、飯舘村の村民は、帰村・未帰村、昼間のみ村へ通うなど、多様な背景を持つ。帰村している村民は高齢者が多く、周辺の村や村民同士のつながりが薄く孤立が深まっている。村外居住者は「村民は離れていても村民」だと感じられる機会が減少している現状だ。また、海外からも含め、村を支援したいという支援者も数多くいるが、村との関わりを持てる機会は限定的である。企画を通じてどのように「村との関わり」を増やしていくかが課題となっている。

目　的

この事業は、飯舘村民、そして支援者が飯舘村との関わりをさらに深め、一人一人が村の復興に関わる仕掛けをつくることを目的としている。そのため、以下、3つの目指す形を設定した。①高齢村民に出番を作る仕掛けを作り、生きがいを通じた村の復興への関わりを目指す。②村外に住む村民や家族がどこに暮らしていても村とのつながりを保つきっかけとなるような参加して楽しい仕組みづくりを行う。③村民のみならず海外を含む村外の多様な人々との連携が村の復興への次の一歩となることから、国内外の若い世代の大学生が「村と過ごす」機会を創出することで村の復興への新たな動きを創出する。

取組内容・実績

取組1

「食」を通じて村民や支援者が集い、語り合う場となる「いいたて村の村民食堂」を実施した。高齢者と学生が協働で行う食堂で、月に1回程度、「までいな家」にて開店。提供するメニューは、村のおばあちゃんがつくる漬物、村で昔から作られていたおこわ、学生考案のお味噌汁という「一汁一菜」膳を基本とした。帰村した村民はもちろん、村に通う村民や村で働く方々が「食」を通じて交流する場となっている。さらに、「村民食堂スピンオフ」として、日本と台湾の学生などの村の支援者や、村への移住希望者が出店するチャレンジレストランも開催した。

取組2

「までいな村」として村づくりを行ってきた飯舘村が持つ手業を活かした企画「飯舘村体験博覧会こちら五合目、応答せよ!～までいな山の登りかた～」を実施。①村民、②村への移住（希望）者、そして③支援で村に入る大学生という3者が協働で、それぞれの手業を活かしたワークショップ（以下、WS）イベントを6カ月にわたり12のプログラムで提供した。伝統の食文化である凍み餅づくりWS、お母さんサークルによる裁縫WS、地域おこし協力隊によるラテアート教室やキャンドルづくり、そして学生によるダンスWS、移住希望者によるアロママッサージWSなど多様なプログラムに多くの村民、村外市民の参加を得た。

取組3

日台若者交流の促進を目指す本プロジェクトは、今年度、台湾の福島県産品輸入制限解除を受け、「風評対策」から「魅力発信」へと目的をシフトした。被災地福島へ心を寄せてくれた人々に、さらに一歩進んで福島のファンになってもらおうという企画である。本年度は、①福島大学生が企画し台湾人留学生を招待した福島研修旅行、②福島大学生が台湾を訪れ飯舘村の復興の現状、福島の魅力を伝え、福島への来訪を誘う台湾研修旅行を行った。①では、取組1、取組2の成果を組み込み、福島、そして福島大学生の企画でしか体験できないオリジナルな研修旅行プログラムを企画できた。また②では、台湾の文藻外語大学・台北大学と3年ぶりの対面交流を行い、台湾学生との今後の交流と福島研修旅行実施の基盤づくりができた。

事業の成果

- 村民食堂では、帰村した村民、村へ通う村民が集い、語り合う場となったことで、普段会わない村民同士が久しぶりに交流・情報交換する機会を創出できた。また、学生や村役場職員、村で働く方々など、世代を越えて交流する基盤ができた。
- 取組1、取組2どちらにおいてもチャレンジ枠を設けたことで、飯舘に移住したいと考えている若者が村でWSに挑戦したり、昔村で活躍していた人々が十何年ぶりに飯舘で活動したり、村民から「挑戦してみたい」という声が出たりと新たな復興を支える動きを作り出すことができた。
- 今まで飯舘村に訪れたことがなかった人々が飯舘村に来るきっかけを創出できた。「何か面白いことが起きている村だ」という印象を与えることができた。
- 研修旅行を通じて、台湾、そして福島の学生が福島の魅力を改めて感じるとともに、飯舘村の復興への状況・そして魅力を伝えることができた。

今後の展開

今年度の事業を行っている途中に、多くの村民からアイデアや共同企画の提案、協力したいといった声を頂いた。また、初めての企画も多かったが、事業の基盤を整えることができた。来年度はさらに多くの村民や支援者とともに企画を拡大させていきたいと考えている。

ファンドレイジング力向上による、福島県内NPO等団体の組織基盤強化事業

一般社団法人 Bridge for Fukushima

団体概要	
所在地	〒960-8061 福島県福島市五月町2-22
TEL/FAX	024-502-7121
E-mail	info@bridgeforfukushima.org
URL	https://bridgeforfukushima.org

活動地域	福島県
活動分野	社会教育 まちづくり 災害救援 国際協力 子どもの健全育成 その他

課題・背景

福島県内NPO等には復興財源を頼りにする団体が多く存在しますが、震災から12年が過ぎて、財源の縮小は避けられない傾向です。みちのく復興・地域デザインセンターの調査（2021年3月）によると、回答した東北のNPOの52.9%が「資金不足」を課題とし、特に事業規模500～1,000万円/年の団体では84.4%となっています。当団体では本事業の採択を受けて、一貫して県内NPO等の組織基盤強化の支援を行ってきました。今年度は「資金調達（＝ファンドレイジング）力の向上」を主軸に発展させた中間支援事業です。

目　的

今事業では県内の復興支援を行うNPO等が組織・事業・財源の持続的な成長と発展を自ら推進して、今後も現場で被災者が必要とする支援を継続できるように、組織基盤強化の中で最も重要な資金調達（＝ファンドレイジング）力を向上させることが目的です。そのための重要なツールでもあるロジックモデル（事業の設計図）作成支援も行います。

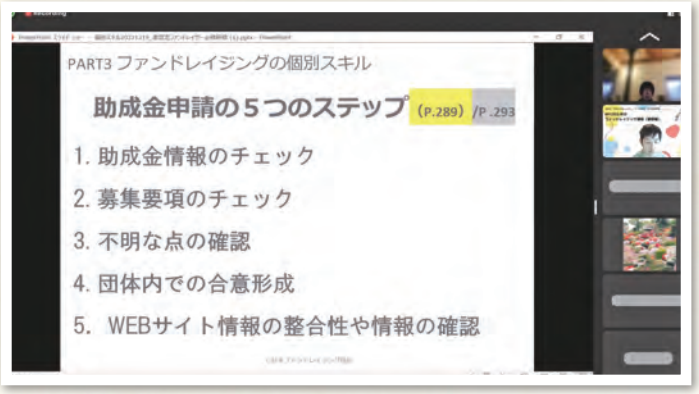
取組内容・実績

取組1

ファンドレイジング研修〈基礎編〉（オンライン開催）

日本ファンドレイジング協会の認定講師及び認定ファンドレイザーによるファンドレイジングの基礎研修を開催。ファンドレイジングの概論及び実践や個別スキルについて講義＆ワークショップで学んでいただきました。当日参加できなかった団体には収録動画を公開しました。

●開催日／2022年12月19日
●実施団体／7団体（個人も含む）



取組2

ロジックモデルの作成支援

当団体のスタッフがロジックモデルの作成を伴走支援しました。複数の団体が参加した研修では、互いのロジックモデルを発表して意見交換をするなかで、さらにブラッシュアップできた団体もありました。

- 開 催 日／2022年8月～2023年3月
- 実施団体／7団体（個人を含む）
- 開催場所／当団体事務所及び「南相馬市市民活動サポートセンター」会議室

取組3

高校生・大学生向けロジックモデル研修（オンライン開催）

放送大学・講師の三好崇弘氏を迎え「ロジックモデル研修」を実施。未来の復興の担い手である若者を対象に、PCM（プロジェクト・サイクル・マネジメント）手法を使ったワークショップを開催。課題解決プロジェクトの組み立て方を学んでもらいました。

- 開 催 日／2023年3月3日・4日
- 参加者数／12名
- 開催場所／当団体事務所及びサテライト会場（2ヵ所）

事業の成果

- 参加団体から「資金調達方法に悩んでいたが、クラウドファンディングに挑戦してみたいと思った」「次年度の活動資金について考えていたところだったので、計画策定のプロセスが参考になった」「資金調達担当として孤軍奮闘していたが相談できる相手の存在を知って安心した」等の声がありました。
- ファンドレイジング研修については、日本ファンドレイジング協会の准認定ファンドレイザー資格を取得して自団体の組織基盤強化を図りたい、という参加者もいました。
- 研修の中で複数の団体が交流することで「協働・連携することで、互いの事業を更に進めることができそう」などの意見がありました。連携による副次的な成果が期待できます。
- 今回も県内の中間支援団体（南相馬パブリックトラスト）との連携を継続できたことも成果のひとつです。

今後の展開

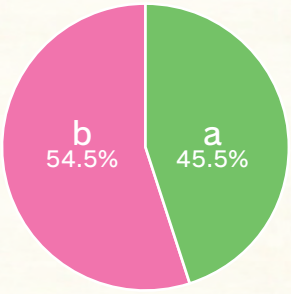
震災後に起こった社会課題は、カタチを変えてより複雑化しています。一方で県内の非営利団体を取り巻く環境は、資金面、人材面など様々な局面で厳しくなってきています。これまで、ロジックモデルの作成や社会的インパクト評価への取組、組織評価、ファンドレイジング研修などに取り組んできましたが、今後も、県内のNPO等の組織基盤強化につながる支援を続けていきたいと考えています。

アンケート
調査結果

実施団体数：22団体

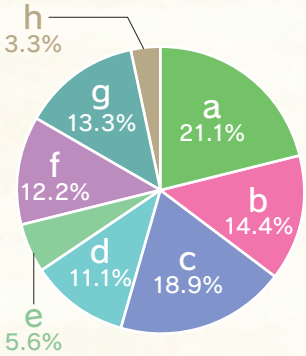
1 ふるさと・きずな維持・再生支援事業（以下「きずな事業」という）はどのような活動を展開したものですか？

a	今までの活動の一部内容を発展させたもの	45.5%
b	今までの活動の範囲を拡大したもの	54.5%
c	新しい活動として取り組んだもの	0%
d	他団体の既存活動を継承したもの	0%
e	その他	0%



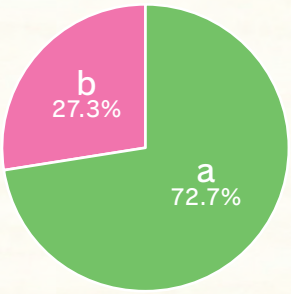
2 きずな事業ではどのような団体と連携しましたか？（複数回答可）

a	行政	21.1%
b	NPO法人	14.4%
c	任意団体（ボランティア、地縁組織等）	18.9%
d	公益法人（財団法人、社団法人等）	11.1%
e	経済団体（商工会、商工会議所等）	5.6%
f	企業	12.2%
g	教育機関（大学等）	13.3%
h	その他	3.3%



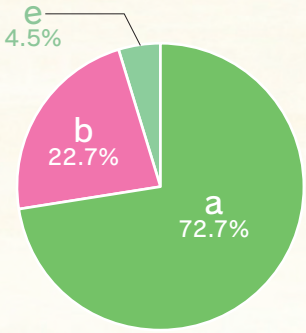
3 きずな事業では他の団体と上手く連携することはできましたか？

a	各主体の特性を十分に活かすことができた	72.7%
b	各主体の特性をある程度活かすことができた	27.3%
c	各主体の特性をほとんど活かすことができなかった	0%
d	その他	0%



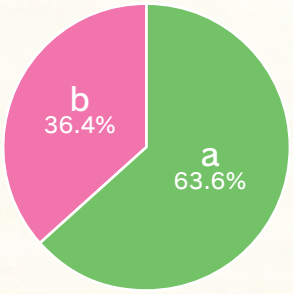
4 きずな事業では地域住民の理解は得られましたか？

a	十分に理解や共感が得られた、又は、多くの参加もあった	72.7%
b	ある程度の理解が得られた、又は、一部の参加もみられた	22.7%
c	一定の理解が得られた	0%
d	あまり理解は得られなかった	0%
e	その他	4.5%
f		



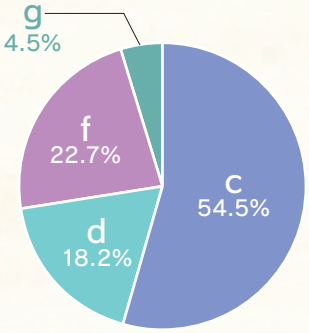
5 きずな事業で実施した取組について、目標は達成できましたか？

a	概ね目標を達成できた	63.6%
b	目標の7～8割程度は達成できた	36.4%
c	目標の半分程度は達成できた	0%
d	目標の一部を達成できなかった	0%
e	その他	0%
f		



6 きずな事業で実施した取組について、改善すべき点はありましたか？

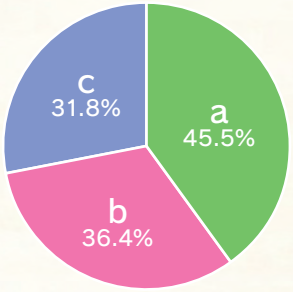
a	地域のニーズに合致していなかった	0%
b	関係機関の協力が得られなかった	0%
c	事業期間が足りなかった	54.5%
d	需要が大きくカバーしきれなかった	18.2%
e	当初の事業計画、実施体制に無理があった	0%
f	その他	22.7%
g	無回答	4.5%



■ その他意見
- 特に大きな改善すべき点はありませんでした。
- 継続的な作業が必要な取組で人手の確保が困難だった。
- 教員への告知期間が短すぎた。

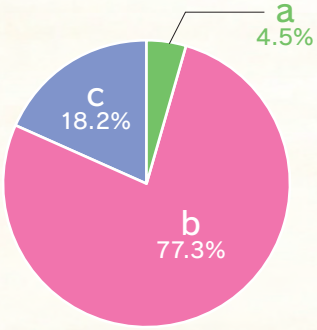
7 きずな事業終了後、その取組については継続しますか？

a	事業を拡大して継続する	45.5%
b	同様の取組を継続する	36.4%
c	一部手法や内容を変更して継続する	31.8%
d	継続しない	0%
e	その他	0%



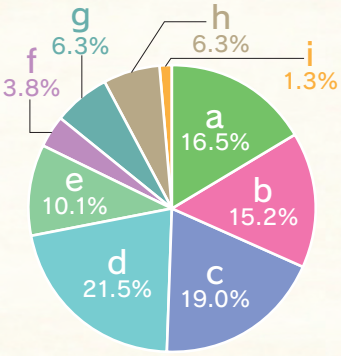
8 きずな事業の取組の継続について、資金調達の予定はどうですか？

a	必要な資金はほぼ調達可能である	4.5%
b	必要な資金の一部は調達可能である	77.3%
c	必要な資金の調達の目途は立っていない	18.2%
d	その他	0%



9 きずな事業の取組の継続・発展に必要なものは何ですか？（複数回答可）

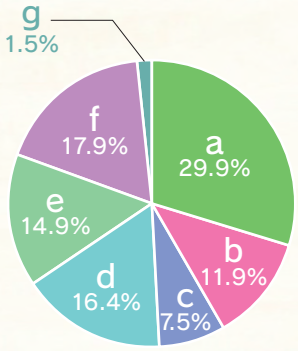
a	事業に協力してくれる人材の確保・育成	16.5%
b	行政による側面支援	15.2%
c	他の主体（地域住民、NPO、企業等）との協力・連携	19.0%
d	補助金・助成金の充実	21.5%
e	会費・寄付の増加	10.1%
f	自主事業の拡大	3.8%
g	地域資源の活用	6.3%
h	専門的知見やノウハウの取得	6.3%
i	その他	1.3%



■ その他意見
・組織の再構築

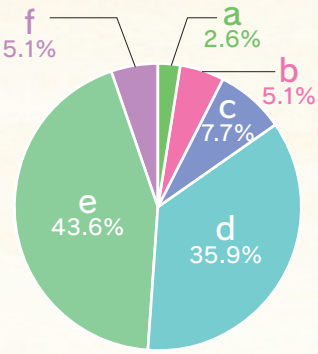
10 きずな事業を実施した成果として何が挙げられますか？（複数回答可）

a	様々な団体とのネットワークができた	29.9%
b	地域課題に取り組む人材が育った	11.9%
c	専門的なノウハウ等が習得できた	7.5%
d	効果的な事業立案・実施が可能となった	16.4%
e	住民主体の活動につながった	14.9%
f	地域資源を活用することができた	17.9%
g	新たな起業や雇用の創出につながった	1.5%
h	その他	0%



11 きずな事業を実施後、団体組織として変化したことはありますか？（複数回答可）

a	会員数が増えた	2.6%
b	寄付が増えた	5.1%
c	スタッフが増えた	7.7%
d	支援者が増えた	35.9%
e	団体の知名度が高まった	43.6%
f	その他	5.1%



■ その他意見
・専門的なノウハウ・知見の習得

12 本県の復興支援・風評払拭等の活動について、今後もきずな事業を活用して活動を継続したいですか？

a	継続したい	100%
b	どちらかというと継続どちらかというと継続したい	0%
c	どちらかというと継続しなくてもよい	0%
d	継続しなくてもよい	0%
e	その他	0%

13 12.の回答の理由を教えてください。

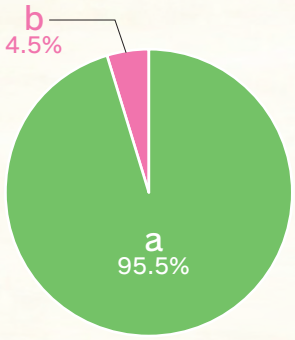
- 継続して実施することで、目的を達成できると考えるからです。
- 関西地域で活動を継続することで、学生たちが福島を知るきっかけとなり、また、地域の皆様に、福島県の現状と魅力発信の情報起点になりたいと考えております。
- 着実に自分たちの活動を応援してくださるファンの方々が増えてきているので、継続して活動を続けていきたいが、当NPOは財政的に弱小なため、今後もきずな事業を活用したい。
- 旅費交通費や焼き台の運搬費などの経費がかさむため、補助事業が無ければ県外での浜焼き販売イベント継続していく事は難しいと思われるから。
- 事業を実施するにはどうしても資金獲得がネックとなってしまう。このようなかたちで補助していただけると事業を実施することができとても助かりました。風評払拭は長期にわたっての活動が必要不可欠だと思いますので継続して活用したいと考えました。
- 原発事故による放射性物質による森林や里山の汚染により、山菜やキノコといった山の恵みの利用は未だに回復していない。一方で放射性物質についての正確な知識が広がっていかないなかで、この問題への関心が薄れてきている。人々が関心を持ち続けてもらうためには、自然と人間との関わりについて興味をもってもらう多様な取組が必要と考える。
- 教員の被災地視察研修ツアーに参加した校長から、「次年度は学校安全担当に学ばせたい」という希望が寄せられている。また、避難者からも、地域市民に風評払拭、東日本大震災の風化防止を図る活動を行いたい意欲を聞いているため、引き続き活動を継続し、復興支援に貢献したい。
- 相馬地域は、度重なる地震の影響により、東日本大震災から続く課題も見えにくくなっている。さらに本年はALPS処理水の海洋放出も行われ、その影響はさまざまな場面で出てくると思われることから、12市町以外の地域への継続的な支援も必要不可欠と思う。
- 震災からの復興や風評払拭の必要性はまだまだ多く、きずな事業によって多くの自治体や団体との交流が広がり続けているため、今後もきずな事業を活用した活動の継続は大変重要になってくると思います。
- まだまだ事業規模として小さいため、事業規模拡大のためにも活用したい。
- 今回の事業を通じて、多くの方から「今後も継続して実施してほしい」という声を頂いた。ALPS処理水の海洋放出を目前に控え、風評の広がりが懸念される今だからこそ、より多くの方に向けて本県の魅力を伝えていく必要がある。
- 復興は道半ばと考えている。
- 本県の復興は目に見えない「人のつながり、人と人の信頼」を取り戻さなければならないと考えている。時間も人手もお金もかかるものである。
- まさに事業目的にあうものであり、活用継続を希望します。
- 参加者をはじめ関係者から継続の声が多く寄せられている。
  現活動を基に新たな事業にも取り組み、参加者と共に県内の地域文化活動の向上を図りたいため。
- 熊本県と福島県という遠距離の事業において、人や物品の移動が不可欠でそれには資金が必要です。企業などの寄付も考えられますが、このような補助金・助成金を活用することが、住民・民間にとっては事業を行いやすいと思います。

●広域避難者支援団体向けの中間支援の取組はこれまであまり実績もなく、必要性が高い。加えて、支援活動が収束に向かう地域もあることから、そうした地域で得られている知見を、きちんと他の地域と共有し残していく取組が必要であるため。
●まだまだ風評払拭を含めた復興のゴールは遠い。ワンアースにできることは山積しており、今後も役に立ちたい。
●課題は継続し、長期間にわたる対応が必要なものばかりである。地域からの反応もよく、また目に見える形で地域を支える人材が育っていることが実感できる。自己収入を増やす努力を行いつつも、全ての経費が賄えるまでにはいまだ育っているとは言えない。
●本県の復興支援・風評払拭等の活動を続ける団体を組織基盤強化の面で支えていきたいと考えているから。
●やりがいがあるため。当法人の活動で得られていた人のつながりや保全していた資料を生かせるから。また、文化保全をしていた避難地区の歴史的な資料や民具などで、福島県の魅力を伝えることができそうだから。

14 被災者や今回の活動で支援した方（受益者）からは、今後のきずな事業の継続についてどのような声が多かったですか？

（受益者アンケートの結果や実際の受益者からの声に基づいてお答えください。）

a	継続してほしいという声が多かった	95.5%
b	どちらかというと継続してほしいという声が多かった……	4.5%
c	どちらかというと継続しなくてもよいという声が多かった	0%
d	継続しなくてもよいという声が多かった ……	0%
e	その他……	0%



15 14. の回答について、受益者から理由や意見、感想などを聞いていたら教えてください。

●いい活動であると評価いただいており、継続的に購入できる、より広げてほしい。
●リピーターのお客様が多く、関西から福島県の応援を継続したいという声を多く頂きました。
●これからも新鮮で安心な野菜たちを紹介してください。
●きゅうりが安くて助かった。
●一人暮らしの娘にも送っちゃいました。ぜひ続けてください。
●これからもがんばってください。
●アンケートを実施したが、浜焼きをイベントの実施をした方が良いとの意見が98%となり、自由記載欄に、「海産物の風評払拭のために引き続き実施してもらいたい。」「相馬の魚の美味しさを知った」「風評払拭とともに沿岸地域の活性化につなげてほしい」など多くのコメントを頂いたため。
●風評払拭に関してPRできる場は少なくなってきている。こういった場を提供していただけるととても助かるとのお声がございました。
●霧箱展示など、目に見えないものを視覚化して、わかりやすいと説明を受けた方の大多数が反応してくれた。座学でなく興味が持てた。高齢者を対象としたアートワークショップでは、ケアスタッフから新しいアイディアの提供など刺激になるとの評価があった。
●今回のツアー内では回りきれなかった復興施設にも訪れてみたいと思った。
●震災を体験した先生方のお話で新たな学校を立ち上げたことについてもっと聞きたい。
●いわき市の復興状況や農業の復興の様子についても知りたいと思った。

●震災当時と同時期に訪れて、気温なども感じてみたい。
●教育関係者からは、「震災のことや地域のことを子どもたちに伝えたいが、地域とのつながりがない。どのように進めていくとよりよい学びにできるか」という声を聞いている。
また、企業からは「同じような世代や顔ぶれとしか話すことがなかったので、若い世代からの声を聞きながら考えることは刺激になった」という声を聞いている。
●また来てほしい、また参加したい、他の内容にも興味がある、お米づくりのことを理解できて嬉しい、ものごとの仕組みを理解することの重要性に改めて気がついたなどの声が多数あった。
●なかなか人材の確保や復興事業の担い手が少ないことから、プロジェクトを推進できていないところをインターン生が入ることで、事業促進につながったという声があった。
●福島を訪れた大学生から、「後輩を連れてまた福島を訪れたい」と、下の世代へと福島での学びや経験を伝えていきたいという声が聞こえてきた。
●本会が実施している事業に多く参加している人たちは、この事業で人との信頼関係、自分自身の生きがいを自覚していて、事業の継続を望んでいます。
●仲間が増えて日々の生活にも潤いができています。今後も変わらず続けていきたい。
●避難後、人と話をすることもない生活から他の人との会話を笑ってできることが嬉しい。
●人との出合いで孤独感を味わわない。少しでも前向きに生きていきたいです。
●新たな発見や気づきが心の復興に役立っていると思うので、活動を続けられると良い。
●とても楽しく、元気が出た。家族で参加できて良かった。誰も排除せず、人の交流が生まれるのが素晴らしい。
●直接会話をしたり、応援の声を聴くことができる機会があってよかった。
●どんな商品を求めているのか知ることができた。
●歴史的にも縁のある土地での開催、今後も続けてほしい。
●受け入れてくれる場所があるのは嬉しい。
●県域を越えて、支援活動について情報交換する機会や、福島の現場まで足を運ぶ機会が通常業務内ではなかなか得られないためこうした中間支援の取組が大切。
●宇宙酒の試飲販売など、たいへん好評だったため。
●飯舘村民から取組1、取組2どちらにおいても「来年度は一緒にやりたい」という声を頂き、現在打ち合わせや試作会を行っている。また、イベント参加者からは飯舘に来るきっかけとなった、震災直後は支援していたが、最近は来るきっかけがなかったからありがたいという声を頂いた。今年度は移住希望者へのアウトリーチという成果があり、取組①②においてもチャレンジショップの提供など新たな展開の芽も見えた。
●「活動の持続性を担保するために、資金調達の重要性は認識しているが、どんな方法があって、何から始めると良いのかがわからなくて困っていた」等の声がありました。
●「大変だと思うが価値のある事なので続けてほしい」「継続が力につながるので続けて」「世代を超えて伝える事が大切な原発事故の地域での企画」「忘れないことが大切」など、理由の欄に書いていただいていました。

16 きずな事業の実施において、特に苦労した点は何ですか？（自由記載）

●スケジューリング
●年々事業拡大をしていくなかで、経理書類等の処理に時間がかかってしまった。
●事業申込まで時間がなく、十分な計画をたてることができませんでした。
今回、初めて参加したため勝手がわからず、会計処理などの必要書類の説明会の前に初回の事業は行ったため、必要な経費が補助対象外（クレジット払い、採択前の購入日）となってしまったことと、独自の書類の書式で進めていたため、書類の作り直しが多かったことです。
●村外のクリエーターと村内の協力者とが円滑な関係を築いて協力しあう状態を作り出すことを目指したが、相互の信頼関係ができるまでには時間がかかると感じた。

●視察内容の企画に苦心した。震災を体験した被災地の教員にお話を伺う機会をつくること。11年が経過して、当時のことを話せる教員が少なくなっていた。
●国や県のデータも、年ごとに収集方法や公表方法が異なることから、これまで蓄積してきたデータと単純に推移化や比較できないなど、正しくデータを取りまとめることに苦労をした。また、中学生によるデータづくりからPRアイディアを考え発信する取組を、短期間のなかで中学生にとっても地域の方々にとっても有益なものにするための設計に苦労した。
●他地域での活動が多く、遠隔での打ち合わせ等に難しい点が数多くあった。しかし、現在では電話やメールに加えてオンラインミーティングなどの手法が加わりつつあるため、今後はそうしたものも活用していきたい。
●学生側の確保が例年に比べて苦戦した。
●イベント集客など。
●申請時に本会の実施している事業内容を説明しても理解を得られなかったことが残念であり苦しかったです。今回は事業の内容は継続に加え新しいものもあったため、事業期間が短かった点に大変苦労しました。
●年間を通して取り組んでいる事業であるが、今般二次募集からの開始であった為、補助対象の事業期間が短かった。その分自主財源により活動を実施したので資金繰りに苦労した。
●特産品、商品の保管・開催する場所の設定・福島県からの移動手段・打ち合わせ、交渉のための移動手段のは嬉しい。
●2次募集の事業だったこともありますが、事業期間が限られている中で、新型コロナウイルス感染症の影響を避けながら事業を展開する工程管理が大変でした。
●当団体の拠点が茨城県なので、日常的に福島に居られないこと。
●充実した企画にするには十分な企画準備の期間が必要だが、関係者との交渉を通じて共通理解と了解を得る必要があり、とても時間がかかる。スタッフの充実によって企画の分担等の工夫が必要なことを実感した。
●わかっていたことではありますが、今年もやはりコロナの影響が大でした。参加を希望されても当日参加できなかったり、その後のフォローアップの予定が立たなかったり、なかなか調整できなかったり、ということが多くありました。
●コロナ禍で、イベント会場が少なかったことと、和太鼓を使う伝統芸能公演（太鼓が響くと断る会場が多い）をパネル展と同時に開催したために、多くの人の来場を促すことに苦労した。専門家の指導で冊子を作製したが、素人には時間のかかる取組でした。

17 復興支援活動等において、現在、特に課題となっていることについて（自由記載）

●それぞれの立場によって「復興」の捉え方やビジョンが違うこと。
●コロナ禍により、ホテル業界を志す学生が減少している。そのため、本校の入学者数も激減しており、次年度の卒業年次生が4名になります。今後、活動を継続するために、新しい形や内容、できることを考えていきたいと思っております。
●松川浦ガイドの会は任意団体のため、今後はNPO法人へ団体の組織を変更したいと考えておりますが、申請の手順や、必要書類、組織設立後の運営方法などがわからないことです。
●活動している地域の高齢化が進展していると同時に、活動団体の構成メンバーの高齢化も進んでいる。10年を超える今までの活動の中から、次の世代に引き継ぐべきものを整理し、次世代の人たちの活動をサポートしながら、全体として効果的な活動の道筋をつけていく必要がある。
●震災の経験や体験といったソフト面での復興の教訓や知見をいかに伝えていくかという点が課題。また、語り部となる被災者や避難者の活動経費を確保して、自由度をもった活動を続けられるようにすること。
●東日本大震災による課題だけではなく、新型コロナウイルス感染拡大や台風19号及び10.25

豪雨、2021年・2022年の福島県沖地震と、度重なる災害により、課題が積み重なり続けていることである。東日本大震災から12年経過し、住民の高齢化とともに、プレイヤーも限られ、プレイヤーひとりへの負担も大きい。なにより、何重もの災害により、住民の方々の経済的負担やこころの苦しみも大きい。これらの災害の経験を無駄にすることなく、問題が起きた原因を整理するとともに、未来に向けた対策づくりや連携体制づくりの構築が必要である。

- 復興支援活動で最も大きな課題は人的、経済的支援が欠かせないということです。能力や経験が豊富で意識の高い人材はどうしても都会に集中しているように思いますが、風評が続いているのはそうした都会だと考えられます。また海外への情報発信も重要ですので、今後もそうした資金的な支援も継続して必要になると思われます。
- 担い手の不足。
- 生産現場と消費者との意識の隔たりが大きく、実際に現場を訪れ生産者と交流を行うことが風評払拭に最も効果があると感じているが、そのためには多くの時間や労力がかかる。
- 人材育成と活動資金の充実。
- 行政との連携。

①居住者の増えない地域において復興をめざしてこれからも継続して事業展開をしていく覚悟だが、次につながる世代の人材を育てることがむずかしい。

②活動資金

助成金を申請し、活動資金に充てているが、自主財源を増やすことが中々難しい。自主事業（語り人口演、ガイドなど）の内容を工夫し、助成金に頼らなくても事業展開が可能になることを目指している。

③行政との連携

県又は町で必要としている「伝承活動」「芸術文化活動」による町の復興」を本会も事業の内容としているので、委託又は共同展開などが図れないものか・・・と考える。

- かつての人材不足は活動実績の積み上げにより解消されてきたが、スキルある人材を安定して雇用するために待遇改善をしなければならない。

震災後、復興支援を志すボランティアの無償奉仕によって発足したが、長期化する原発廃炉処理を鑑みるに、活動の持続性を保つために安定財源の確保が課題となっている。

- 人々の心の復興に最適なプログラムの社会認知と人材育成。
- どんなことをするにも、大切なのは人と人のつながりだと思いました。今回の事業を行ったことで、福島県の行政の方たちともお話をする機会を得られ、熊本県という場所で事業開催することに興味関心を持っていただけたことは嬉しいことです。このような事業が大切だと思ってもらい、各市町村などから予算を出していただけるような体制づくりを考えたいと思います。
- 個々の支援団体の活動の実績、特にプロセスについての記録が残らないまま活動が終わっていってしまうこと。次の災害に向けて教訓・知見を残していくことを、もし支援団体ができないのであれば、中間支援組織がしっかり担っていくべき内容と感じています。
- 福島県産品の魅力アピール力あるいは手段がさらに必要と感じる。優れているものが多い割には全国的には知名度が低いことに、県民も悩んでいる。お金を掛けた宣伝広告ではなく、宇宙のような尖ったキャッチコピーが有効と考える。
- 震災から時間が経過し、課題は残っているのに、対応できる組織の力が全般的に弱まっているのではないかと感じる。企画やその実施が行政主導にならないよう、また多様な活動が各地で展開できるよう、当組織やNPOなど活動を支える組織の基礎を支える仕組みが必要だと感じる。プロジェクトを実施することは重要だが、それは必ずしも組織基盤の充実にはつながっていないと思う。なかなか日が当たらない組織運営の問題だが、ぜひそうした点にもご配慮いただきたい。
- 復興を担う人材育成と人材確保が各団体に共通する課題だと感じています。特に、団体を立ち上げた創立メンバーの次を担う、若手人材の育成と定着が急務だと感じています。
- 帰還は、個人にとって帰りたい場所での生活でほっとする面も大きいとは思いますが、地域社会を既存の形で取り戻すことが困難だったり、地域社会そのものが形成できない帰還率の場所もある。また人の居住していない地域で復興を企画せざるを得ない所では、地元の声を反映させることが難しいかもしれない。

令和4年度
ふるさと・きずな維持・再生支援事業
活動成果報告書
令和5年3月31日発行

発　　行　福島県企画調整部文化スポーツ局 文化振興課
〒960-8670 福島県福島市杉妻町2-16（県庁本庁舎5階）
電話 024-521-7179　FAX 024-521-5677

運営受託　認定特定非営利活動法人 ふくしまNPOネットワークセンター

事 務 局　ふくしま地域活動団体サポートセンター
〒960-8043 福島県福島市中町8-2 福島県自治会館7階
電話 024-521-7333　FAX 024-521-2741

ふるさとの・きずな維持・再生支援事業

キビタン